

豊原B遺跡

発掘調査報告書

1982

山形県
山形県教育委員会

豊原 B 遺跡

発掘調査報告書

昭和 57 年 3 月

山形県
山形県教育委員会

序

本報告書は山形県教育委員会が、昭和56年度に実施した農村基盤総合整備パイロット事業（庄内地区）に係わる、豊原B遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。

北に出羽富士「鳥海山」を望み、肥沃な庄内平野を舞台とする酒田市東部の水田地帯は、古くから各時代の遺跡に恵まれ豊かな自然環境とともに、価値ある歴史環境をかたちづくってまいりました。国指定の史跡となっている、古代出羽国の国府に擬定される「城輪柵跡」、古代の建築部材を埋設している「堂の前遺跡」は、最近の発掘調査によって明らかにされた所産であります。

本遺跡でも、掘立柱建物跡・土壙跡などの遺構や、土器・木製品などの遺物が検出され、平安期にこの地に住んだ先人の生活行動を実証する貴重な資料を得ることが出来ました。

近年、埋蔵文化財と農林事業との係わりは増加の傾向にあります。本県の産業基盤である農林事業は、県民の生活基盤の整備や福祉の向上を目的とし、豊かな県土を目指して鋭意進められているところであります。

一方同事業は、幾千年前の間土中に埋もれ続けてきた埋蔵文化財と直接的な係わりを持つ事となり、それに関しては数多くの困難な問題が生じております。

県教育委員会においては、生活文化の向上、地域環境の整備等同じ立場から、これらの間の調整をはかり、今後とも埋蔵文化財の保護のための努力を続けてまいる所存であります。また、本書が埋蔵文化財に対する、おおかたの理解の一助となれば幸いと存じます。

昭和57年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹正治

例　　言

1. 本書は山形県教育委員会が山形県農林水産部の委託を受け昭和56年度に実施した、農村基盤総合整備パイロット事業（庄内地区）に係わる、豊原B遺跡（遺跡番号新規）の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、昭和56年4月13日から同年5月28日までの延27日間行った。
3. 調査にあたっては、山形県庄内支庁経済部最上川右岸土地改良事務所、日向川土地改良区並びに酒田市教育委員会、豊原部落などの諸関係機関の協力を得た。ここに記して感謝を申し上げる。
4. 調査体制は下記の通りである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任調査員 佐藤庄一（庄内教育事務所埋蔵文化財調査係長）

現場主任 安部 実（庄内教育事務所技師）

調査員 野尻 侃（庄内教育事務所技師）

事務局 庄内事務所長 小嶋茂太（庄内教育事務所長）

庄内事務所長補佐（総務担当） 藤塚真一（庄内教育事務所次長）

庄内事務所長補佐（庶務担当） 大須賀芳夫（庄内教育事務所総務課長）

庄内事務所長補佐（業務担当） 村岡 敏（庄内教育事務所社会教育課長）

事務局員 菅原 猛（庄内教育事務所総務主査）

5. 本書の作成は、安部 実が担当執筆し、編集は野尻 侃、写真撮影は安部が担当し、全体を佐藤庄一が総括した。実測図等の作成にあたっては、中村敬三、石井 節、水落 みち子、加藤ひとみの協力を得た。

6. 掘図中的方位記号は真北を示す。磁北は真北より西へ8度9分偏る。

掘図の縮尺は、遺構で1/160・1/80・1/40、遺物は1/8・1/4・1/3とし、それぞれにスケールを付した。なお、掘図、図版中の遺物には、共通の遺物番号を付した。

図版中、遺物写真的縮尺は不同である。大きさについては実測図、計測表を参照されたい。

目 次

I 調査の経緯	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の方法と経過	1
II 遺跡の概観	
1. 立地と環境	3
2. 層序	3
III 掘出遺構	5
IV 出土遺物	16
V まとめ	34

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 土層断面図	3
第3図 遺跡全体図	4
第4図 SB30 建物跡	5
第5図 SB40 建物跡	7
第6図 SB80 建物跡	8
第7図 SP128 ピット群	9
第8図 SK3・15 土壙跡	9
第9図 SK10・21 土壙跡	10
第10図 SK16・18・20 土壙跡	11
第11図 SK23・25・28 土壙跡	12
第12図 SK27 土壙跡	13
第13図 SD12・14 土壙跡	14
第14図 須恵器	17
第15図 赤焼土器	18
第16図 赤焼土器	19
第17図 黒色土器	21
第18図 羽口、瓦、石製品、古銭	22
第19図 石製品、中世陶器	23
第20図 珠洲系陶器—壺	24
第21図 磁板、柱根	27
第22図 磁板	28
第23図 磁板	29
第24図 木製品・曲物	30
第25図 木製品	31
第26図 木製品	32
第27図 精査区内遺構配置図	35

図版目次

図版1 遺跡近景、SB40、精査区南側	
図版2 精査区北辺、精査区西壁土層	
図版3 西側トレンチ、SD12・14	
図版4 SB30・40・80	
図版5 SK3・10・15、SP128	
図版6 SK16・18・19・20・22	
図版7 SK23・24・25・27・28、SD29	
図版8 EB41・42・43・44・45・46・48・49	
図版9 EB50・52・53・54・57・58・61・66	
図版10 EB62・63・64・66・67・68・69・71	
図版11 須恵器	
図版12 赤焼土器	
図版13 黒色土器、ふいごの羽口、瓦	
図版14 石製品、金属製品、中世陶器、種子	
図版15 珠洲系陶器、種子	
図版16 磁板	
図版17 磁板・木製品	

表

表1 主要遺構内出土土器片点数表	15
表2 出土土器片総点数表	15
表3 須恵器	16
表4 赤焼土器	20
表5 黒色土器	21
表6 ふいごの羽口、瓦、古銭、石製品	22
表7 中世陶器	25
表8-(1) 磁板・木製品	25
表8-(2) 磁板・木製品	26

I 調査の経緯

1. 調査に至る経過

豊原B遺跡は、山形県酒田市大字豊原字堰向2ほかに所在し、豊原部落の南側水田に位置する。地元民の間では古くから土器、柱根などが出土することで知られていたが(註)、公には、山形県教育委員会1981年発刊の「山形県埋蔵文化財調査報告書第45集・分布調査報告書(8)」で新規遺跡として登録された。

本遺跡が、農村基盤総合整備パイロット事業(庄内地区)の、昭和56年度は場整備施工予定区域内に含まれることとなり、破壊される恐れが生じてきた。このため前年より県農林部、酒田市教育委員会、日向川土地改良区等の関係機関と協議をし、調整を図ってきた。

これにより県教育委員会では、昭和55年10月に現地において試掘を含む遺跡の確認調査を行った。この結果、古代の集落跡であることが推定されたため、再度関係諸機関との協議により、県教育委員会が主体となって、緊急発掘調査を行うこととなった。調査は、庄内教育事務所埋蔵文化財分室が担当し、破壊の恐れがある事業区内に限定して実施する事となった。

2. 調査の方法と経過

調査は、昭和56年4月13日に始まり、同年5月28日までの実質27日間行った。

調査は初め、調査対象地域約1.5haに1区画を4mとするグリッド(第1象限)を設定した。Y軸は真北より西へ8度9分傾む。1つのグリッドの呼称は、北東隅の杭を代表とした。調査の経過は以下の通りである。

4月13日(月)～17日(金) 調査開始。器材の搬入と現場事務所内整備。地区割りの設定。遺構集中区域を探る試掘。仮用水路施設予定地区(11～32-25G)に重機械を使用して、幅1.8mのトレーナーを掘る。25～26～24～25Gの遺構検出。土壌4基検出する。

4月20日(月)～24日(金) 25～26～24～25Gの精査及び遺構の精査、平面図実測。24～23G、25～23G、24～24Gの拡張及び精査。

4月27日(月)～5月8日(金) 精査区を22～28～18～25、26～28～16・17Gの計992m²とし、重機械を使用して表土の除去を行う。遺構検出作業。八森遺跡にて使用中の機材搬入。掘立柱建物跡、ピット検出。遺構精査。

5月11日(月)～15日(金) 遺構精査。断面図実測。25～14～17G、26～28～16・17G 160m²を手掘りにより拡張する。遺構検出、精査。平面図実測。精査区内地区割り。

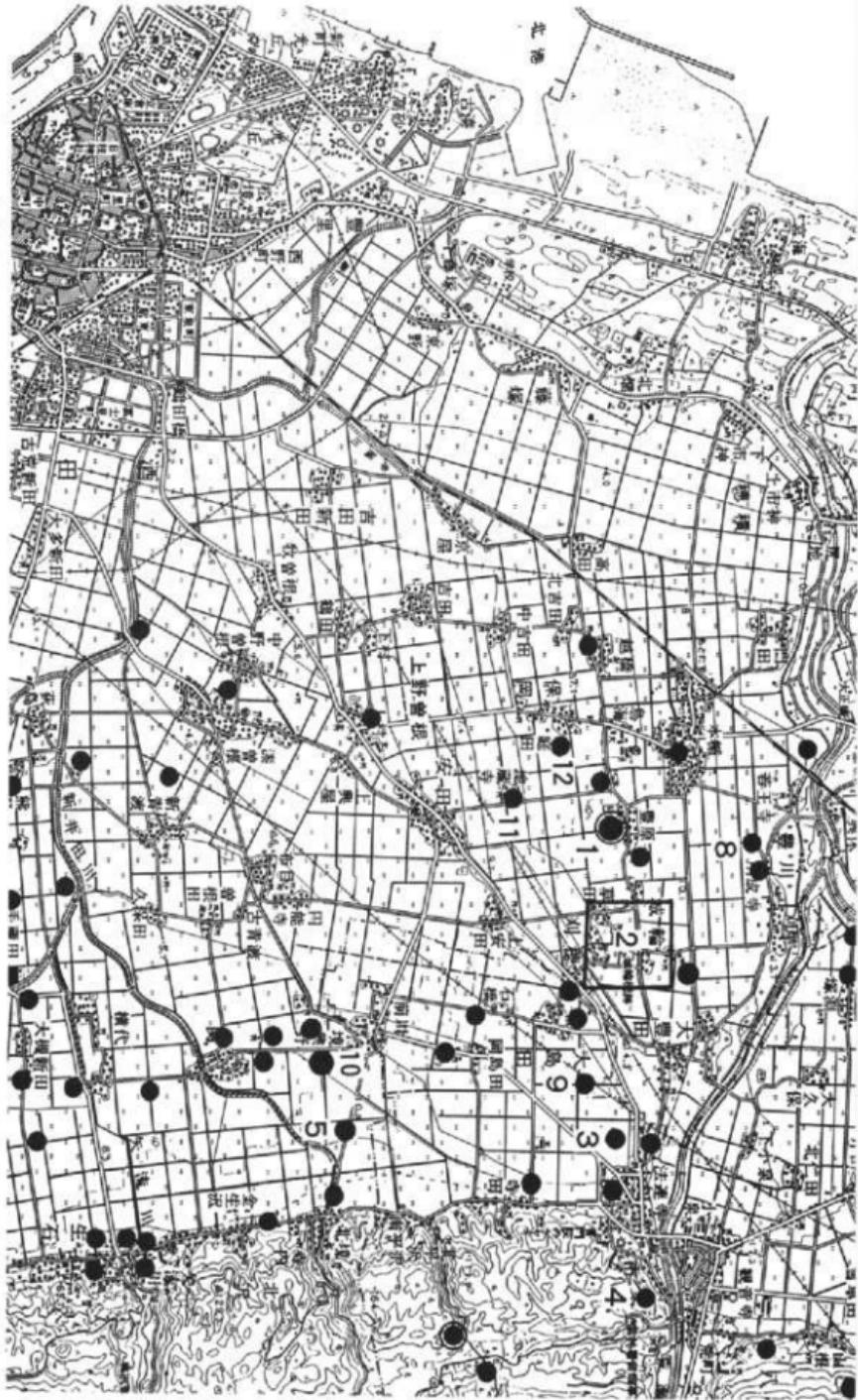
5月18日(月)～22日(金) 遺構検出、精査。平面図実測。

5月25日(月)～28日(木) 遺構精査。平面図実測。26日には現地において調査説明会を行い、約70名の参加者があった。器材撤収。調査区域内外の環境整備を行い調査終了。

註一小野 忍「資料紹介・酒田市豊原出土の須恵器」、「庄内考古学」第13号 1976年 庄内考古学研究会

第1図 遺跡位置図

- 1. 豊原B遺跡
- 2. 城輪櫛跡
- 3. 堂の前遺跡
- 4. 八森遺跡
- 5. 上ノ田遺跡
- 6. 明成寺遺跡
- 7. 安田遺跡
- 8. 鹿田遺跡
- 9. 後田遺跡
- 10. 琴與野遺跡
- 11. 大久保遺跡
- 12. 駒田遺跡



1:50,000 洒田

1000m
1000
2000
3000

II 遺跡の概観

1. 立地と環境

豊原B遺跡は酒田市街より北東約7km、豊原部落の南辺を東西に貫通する県道藤塚八幡線より南へ約100mの地域に位置する。

遺跡は庄内平野の北半部、いわゆる飽海平野の中央に位置する。庄内平野は日本でも有数の穀倉地帯であり、その中央を最上川が西流している。日本海と接する西縁には庄内砂丘が北端は吹浦川河口から南端は湯野浜付近まで約34kmに渡って伸びている。また遺跡の東方約3kmで出羽丘陵の西縁に接し、北方約1.8kmには日向川が西流し、約6kmで日本海へと注いでいる。

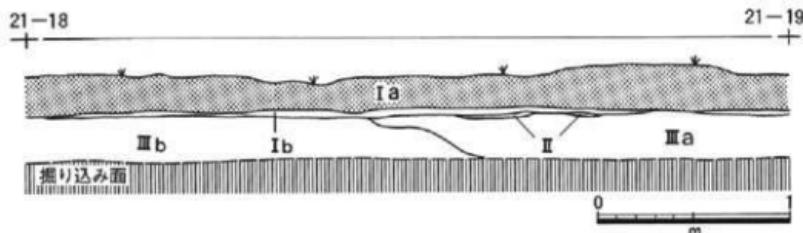
平野部の地形は、西から酒田北部三角州と庄内北部河間低地である。後者はさらに自然堤防、後背湿地、狭義の河間低地に分けられている。大多数の遺跡は狭義の河間低地上に立地している。豊原B遺跡も標高10mの河間低地上にある。

本遺跡の東方約700mで、平安期の出羽国府跡と擬定される国指定史跡「城輪柵跡」の外郭西門跡に至る。この「城輪柵跡」を中心として、日向川・荒瀬川左岸と最上川右岸にはさまれた平野部には、平安時代の官衙跡や、集落跡が多数存在する。

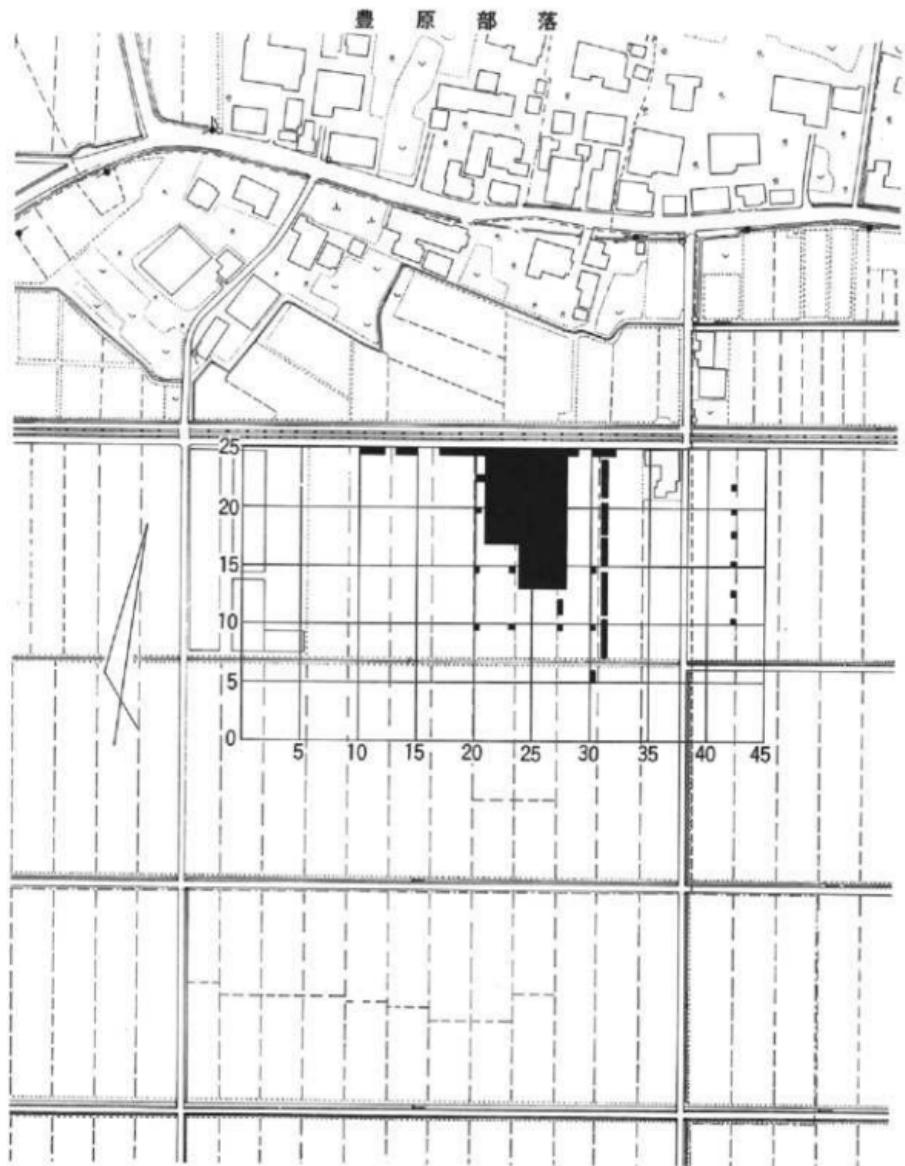
2. 層序

遺跡を覆う表層の地質は粗砂・シルトおよび粘土からなる沖積層で、細粒グライ土壤である。土層の堆積状況は全体に平坦である。検出された遺構は第Ⅲa・b層を掘り込んで作られている。

I a層 暗褐色微砂質土	耕作土である。しまっており粘性がある。厚さは14~26cmを測る。
I b層 暗青色粘質土	厚さは2~6cmを測る。
II 層 黒褐色粘質土	部分的に観察される。厚さは2cmを測る。
III a層 青灰色シルト	ところにより粘性が強い箇所がある。
III b層 暗茶褐色粗砂	精査区南側全域を覆っている。



第2図 土層断面図



■ 一試掘・精査区域

$S = \frac{1}{2000}$

0 100
m

第3図 遺跡全体図

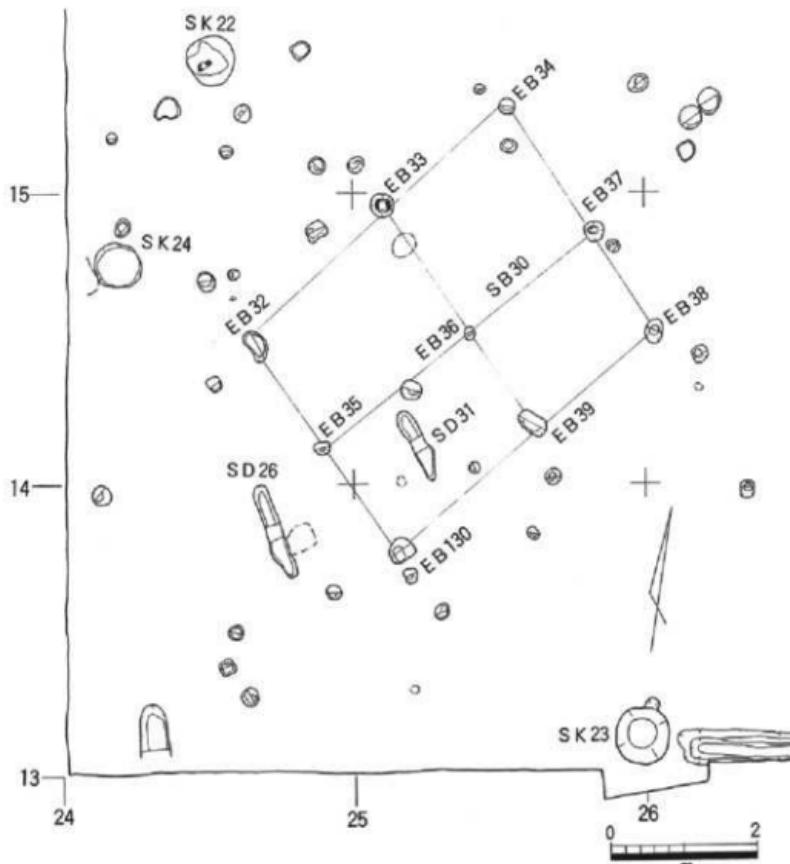
III 検出遺構

本調査で検出された遺構には、掘立柱建物跡3棟、ピット群1、土壙跡15基、溝状遺構8条などがある。以下、順を追って記述する。

なお、遺構の表示に関しては、宮城県多賀城跡調査研究所で採用している方式に大略従った。今回使用した記号は、SB…建物跡、EB…柱跡、SP…ピット群、SK…土壙跡、SD…溝状遺構である。

(1) SB30建物跡 (第4図)

精查区南辺に位置する、2間×2間の小規模な掘立柱建物跡である。方向は東側柱列で真北より西に41度偏る。



第4図 SB30建物跡

柱穴の掘り方は、径22~42cmの円形または楕円形を呈し、深さはEB32で32cm、EB33で18cm、EB34で22cm、EB35で13cm、EB36で22cm、EB37で15cm、EB38で19cm、EB39で5cm、EB130で21cmを測る。EB33・37では1枚の板を使用した礎板が据えられている。柱は柱根が直径8~15cmの円形を呈する所から、円柱が使用されたと考えられる。

柱間寸法は夫々心々で、EB32・33・34で $2.6+2.15=4.75$ m、EB130・39・38で $2.55+2.05=4.6$ m、EB32・35・130で $1.8+1.75=3.55$ m、EB34・37・38で $2.1+1.6=3.7$ mとなる。柱穴掘り方の埋土は、暗青灰色砂ないしシルトで、柱痕部は暗褐色粘質土である。

小規模な倉庫風建物が想定される。

(2) SB40建物跡（第5図）

精査区南側に位置する。桁行7間、梁行4間の南北棟で、四面庇付の掘立柱建物跡が想定される。桁行方向は、北東辺柱列で真北から西へ46度30分偏る。

建物南東辺、EB135とEB136の間にSK18がある。これは、もとあった柱穴の上から掘り込まれたものと考えられ、SB40よりも時期的に新しいものである。

各柱穴の掘り方は不揃いで、円形、楕円形、隅丸方形、不整形などがあり、規模は、円形で直径20~34cm、楕円形で長径38~60cm、隅丸方形で長径40~54cmを測る。深さは10~34cmを測る。埋土は掘り方が暗青灰色砂ないし暗黄褐色粘土、柱痕が暗褐色粘質土である。

掘り方内より、赤焼土器の小破片が、合計で20片出土している。

柱穴のうち14基については礎板が検出されており、EB44・45・48・49・52・71・53・57・59・60・61・62・63・64がそれである。大方は1~3枚の板を据えているが、EB52だけは板と角板を30×40cmの井桁状に組んだものを据えている。これら角材は建築部材を再利用している。

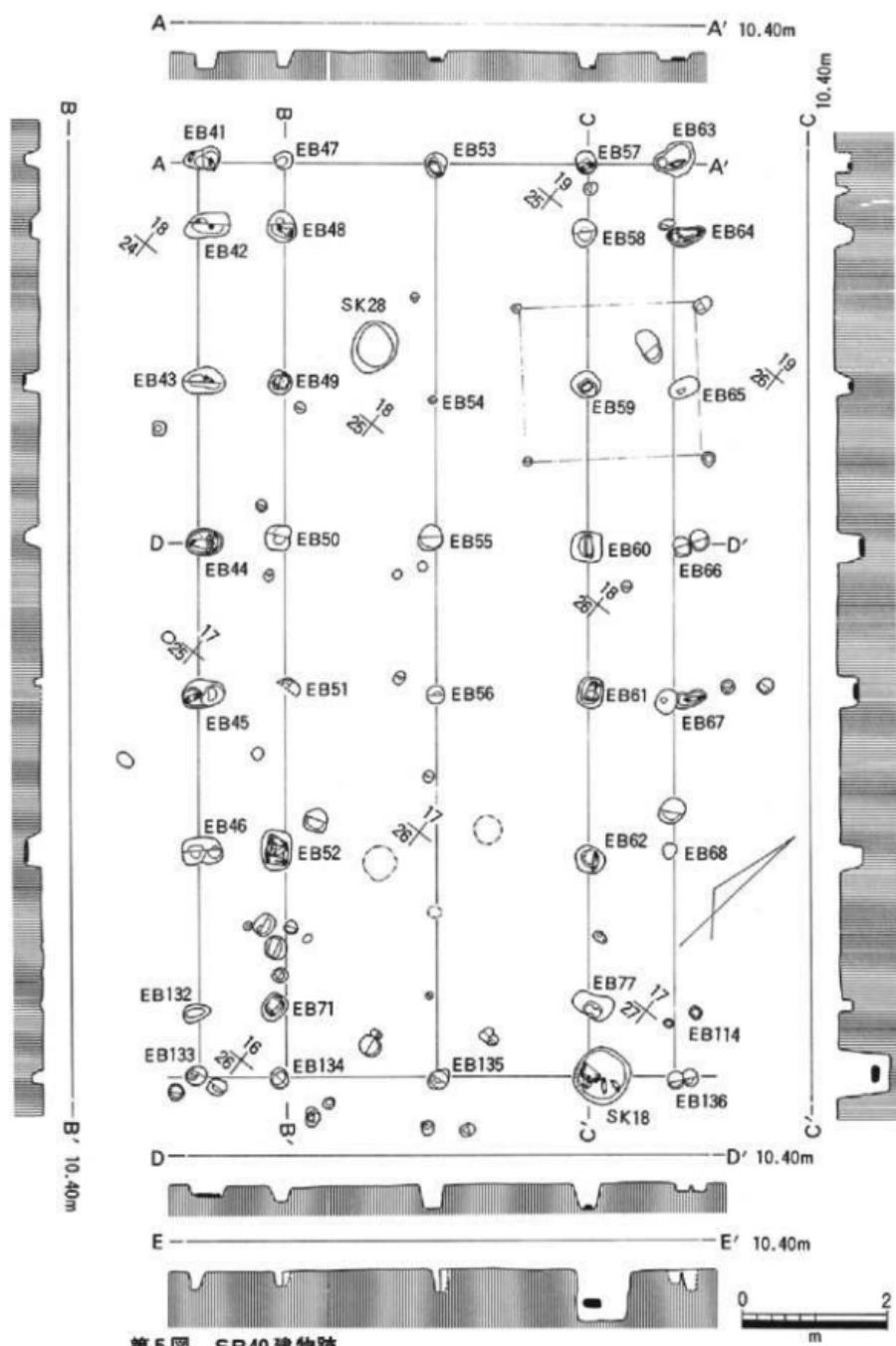
柱痕は、径14cm程度の円形（EB41・47・48・53・58・61・63・66・114・136）、一辺20cm程度の隅丸方形（EB42・43・44・46・49・50・52・59・60・62）で、他は不明となっている。円柱、角柱を取り混せて柱としたのかについては、今後の検討課題である。

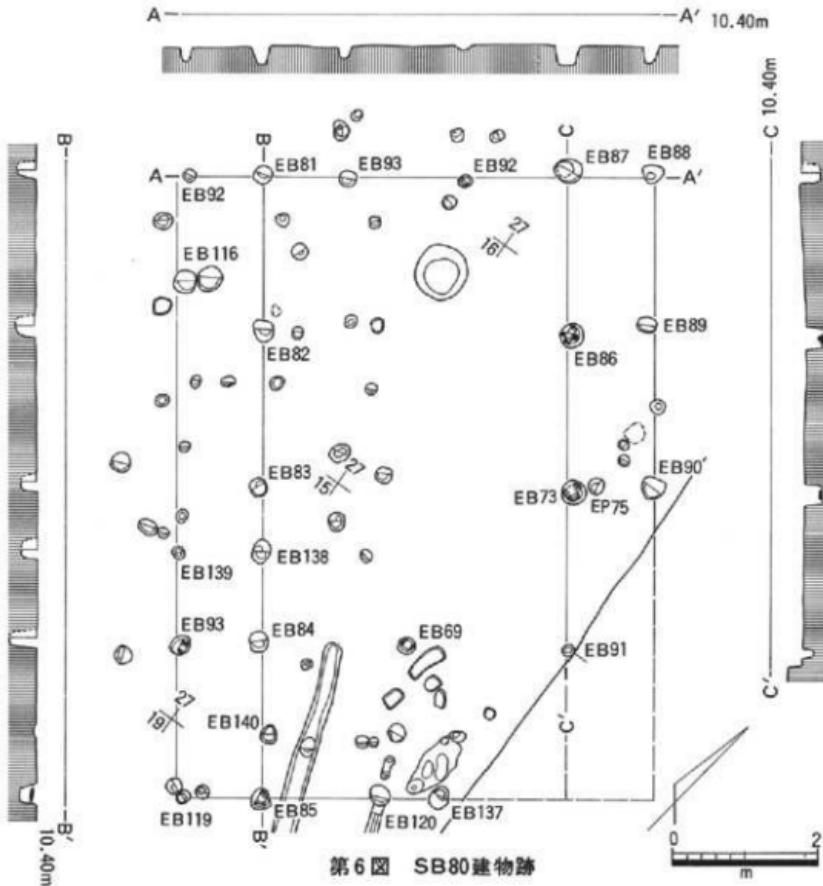
柱間寸法は夫々心々で、桁行長EB47~134の間は、 $0.9+2.1+2.1+2.1+2.1+0.9=10.2$ m、梁行北西辺EB41~63の間は、 $1.2+2.1+2.1+1.2=6.6$ mとなる。身舎は桁行5間、梁行2間ともに唐尺（1尺=30cm）で7尺等間となる。

建物内には、他に間仕切り等と考えられる柱が存在するが、構造上の機能は未詳である。

(3) SB80建物跡（第6図）

精査区南東辺に位置する。建物南東隅については調査期間の関係で拡張することが出来ず未詳ではあるが、桁行4間、梁行5間で両側面に各1間の庇が付いた掘立柱建物跡が想定される。桁行方向は南北棟で、真北から西へ44度偏る。





第6図 SB80建物跡

柱穴の掘り方は大部分が円形を呈し、一部楕円形、不整形を呈する。規模は、円形のもので直径18~30cmを測る。深さは20~40cmを測る。礎板が検出されているのはEB93・85・69・86・73であり、EB86・73は共に2枚の板を重ねて据えている。掘り方の埋土は暗青灰色シルトないし暗黄褐色粘土である。柱痕部は暗褐色粘質土で、径10~18cmの円形を呈する。

柱間寸法は夫々心々で、桁行長EB81+82+83+84+85は、 $2.1+2.1+2.1+2.1=8.4$ m、梁行長は北西辺EB92+81+93+92+87+88で、 $1.0+1.2+1.2+1.3+1.2=5.9$ mとなる。

身舎は桁行4間、梁行3間となる。唐尺(1尺=30cm)で、桁尺7尺、梁尺4尺等間を想定できるが、梁行南辺のEB85・120・137の柱間が、 $1.6m+0.9m$ を測る。建物内には、SB40同様、間仕切り等と考えられる柱が存在するが、構造上の機能は未詳である。

(4) SP128ピット群 (第7図)

SK15の南西辺に位置するピット群である。全体的に見た場合、方向は真北より45度西へ偏るようであり、SB30・40・80等に関係をもつ遺構と考えられる。ピットは、直径10cmから30cmまで種々あり、夫々の対応関係は未詳である。

(5) SK3土壤跡 (第8図)

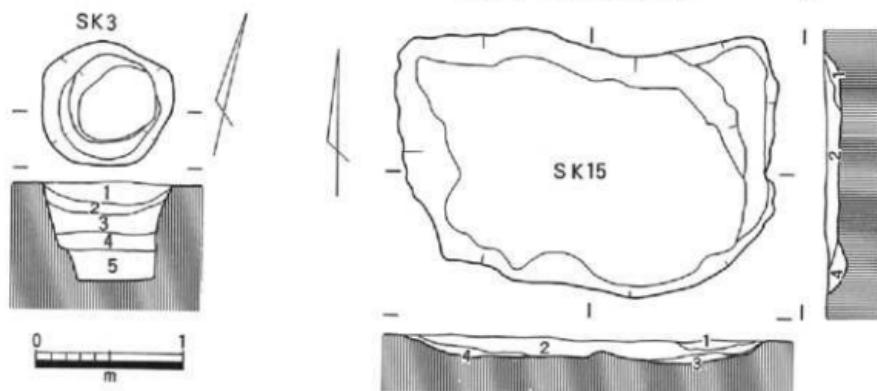
精査区北辺中央、SK10土壤跡の西にあり、不整な円形を呈する土壤である。径90cm、深さ69cmで、西壁に段を有する。壁の掘り込み角度は底垂直より2~14度外側に傾く。底は平坦である。

本調査で検出した土壤中、SK10に次いで赤燒土器片の出土量が多いものである（表1参照）。

種子が1~2層中より4点出土している（図版



第7図 SP128ピット群



SK3土壤跡土層

1. 黒褐色微砂質土・炭化物・黄褐色粒子が混じる
2. 同 上・少量の黄褐色粒子が混じる
3. 同 上・炭化物・黄褐色粒子が混じる
4. 同 上・灰褐色シルトが混じる
5. 黑褐色微砂質土に黒色微砂質土がまだらに混じる

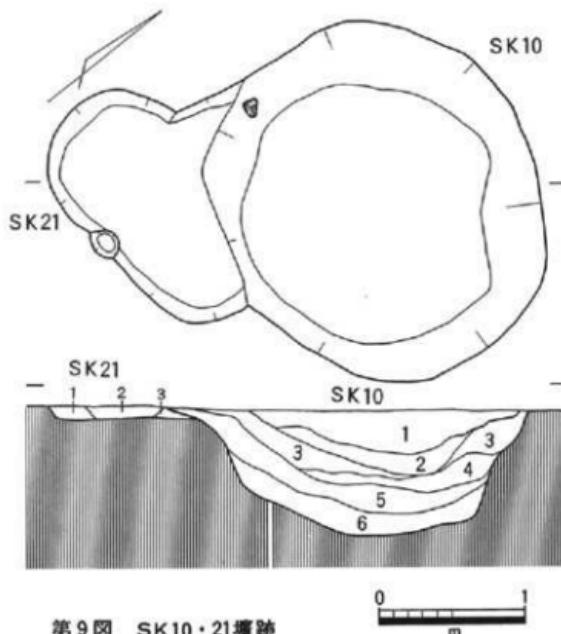
SK15土壤跡土層

1. 黒色微砂質土・炭化物層
2. 同 上
赤褐色と黄褐色土がまだらに混じる
3. 黄褐色粘質土
4. 黄褐色細砂質土

第8図 SK3・15土壤跡

- SK10土壤跡土層
1. 暗褐色微砂質土
 2. 黒色微砂質土
 3. 褐色微砂質土に黃褐色土がまだらに混じる
 4. 黑褐色シルト
 5. 黒色微砂質土
 6. 暗青灰色シルト

- SK21土壤跡
1. 暗青灰色シルト
 2. 暗褐色シルト
 3. 黑褐色微砂質土



第9図 SK10・21土壤跡

14-64)。桃が2点で、1つは長さ2.26cm、厚さ1.38cm、他は長さ2cm、厚さ1.65cm、くるみも2点で、長さ2.86cm、厚さ2.52cmのものと、長さ2.1cm、厚さ1.94cmを測る。いずれも外面は炭化し黒色を呈している。

赤焼土器の壺(第15図11・24)と甕(第16図33)が出土している。

(6) SK15土壤跡(第8図)

精査区北辺中央、SP128ピット群とSK16土壤跡の中間にあり、不整な隅丸長方形を呈する土壤である。長径2.6m、短径1.75m、深さは最大で16cmを測る、非常に浅い土壤である。底は全域にわたり少々起伏がある。長軸が真東を向く。

須恵器甕(第16図31・35)、赤焼土器壺(第15図12・15・17・19)、同皿(第15図28)、同甕(第16図31・35)、黒色土器(第17図39・42・44・48)、フイゴの羽口(第18図49・50)、砥石(第18図54)、他に漆付着の赤焼土器片が1点出土している。

(7) SK10土壤跡(第9図)

精査区北端中央、SK3土壤跡の東脇にあり、SK21土壤跡を切って掘り込まれている。平面形は不整な円形を呈し、長径2.54m、短径2.2m、深さ87cmを測る。底は中央部が落ち込んでおり、断面形は舟底状を呈している。壁は底の垂直面より28~40度の角度を持って掘り込まれている。本調査で検出した土壤中、最大規模のものである。

出土遺物には、須恵器（第14図8・10）、赤焼土器坏（第15図20・21・22・25・26・27・29・30）、同甕、塙（第16図34・36・38）、黒色土器（第17図41・45）、加工石（第18図56）、木製品（第25図96）、種類が不明の種子（図版15-114）、他に焼成をうけた礫片がある。

（8） SK21土壤跡（第9図）

SK10土壤跡に北東辺を切られており、これよりも新しい土壤跡である。平面形は隅丸の矩形を呈し、長径1.68m、短径1.02m、深さ10cmを測る。底は全域が平坦である。

赤焼土器片が90片、黒色土器片が1片出土しており、赤焼土器甕（第16図32）がある。

（9） SK16土壤跡（第10図）

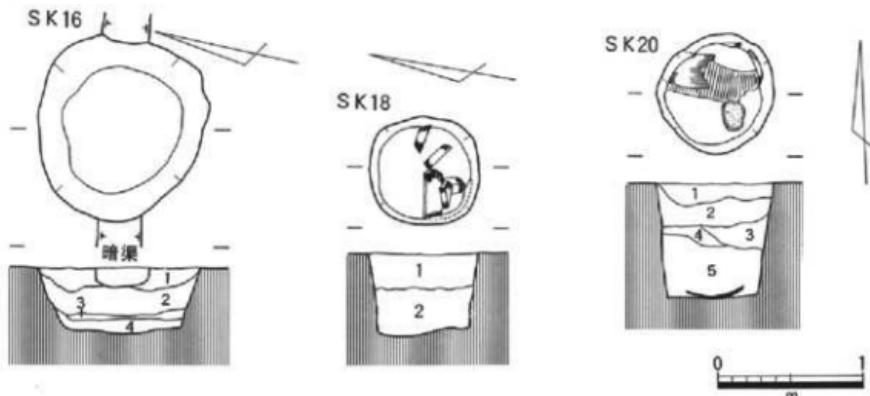
SK15土壤跡の南東にある。平面形は卵形を呈し、長径1.25m、短径1.13m、深さ46cmを測る。底は中央部が僅かに窪む。壁は17~24度で掘り込まれている。

埋土は、草等の焼成炭化物層（1~3層）で、もさもさしている。

出土遺物は赤焼土器、黒色土器が主で、赤焼土器坏（第15図18）、黒色土器高台付坏（第17図40・43・47）がある。

（10） SK17土壤跡（第27図）

精査区中央、SB40に接してある。南北に細長く、長さ3.3m、幅1.1m、深さ11cmを測る。底は平坦である。埋土は、暗灰褐色微砂質土の単一層で、炭化粒子が混じる。



SK16土壤跡土層

1. 黒褐色微砂質土（黄褐色粒子）
2. 黑色微砂質土（炭化物）
3. 黑色炭化物層（もきつく）
4. 暗青灰色シルトと黑色微砂質土
がまだらに混じる

SK18土壤跡土層

1. 茶褐色微砂質土に黄褐色微砂質土がまだらに混じる
2. 茶褐色微砂質土に青灰色シルトがまだらに混じる

SK20土壤跡土層

1. 茶褐色微砂質土
2. 暗褐色微砂質土
3. 茶褐色微砂質土に黄褐色シルトがまだらに混じる
4. 暗青灰色シルト
5. 暗青灰色シルトに暗褐色シルトがまだらに混じる

第10図 SK16・18・20土壤跡

出土遺物は、赤焼土器が主で、赤焼土器环（第15図13）がある。

(11) SK18土壤跡（第10図）

SB40建物跡南東柱穴を切って掘り込まれたと考えられる。平面形は円形を呈し、径75～80cm、深さ71cmを測る。底は北側で窪む。壁は約8度で掘り込まれている。

出土遺物に加工木、板状木製品、箸（第25図97・98・99・100・102、第26図104、113）がある。

(12) SK19土壤跡（第27図）

SB80の北東辺にある。径71～77cmの円形で、深さ44cmを測る。底は平坦で、壁は約18度で掘り込まれている。埋土は茶褐色微砂質土の単一層で、黄褐色シルトがまだらに混じる。人為的埋土と考えられる。

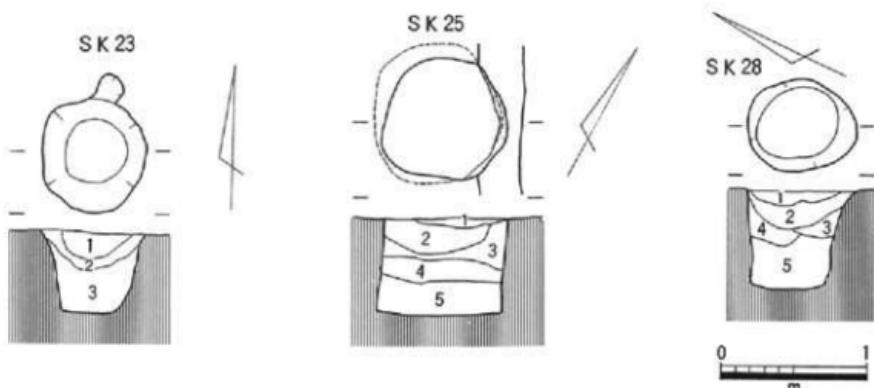
(13) SK20土壤跡（第10図）

精査区南南東辺、SK27土壤跡の西脇にある。平面形は梢円形で、長径85cm、短径78cm、深さ78cmを測り、底は平坦である。掘り込みは6～8度を測る。

出土遺物に、上層より加工石（第19図57）、下層底部より曲物残片（第24図95）がある。

(14) SK22土壤跡（第27図）

精査区南側、SB30の北西にある。径64～69cm、深さ55cmを測り、底は平坦である。掘



SK 23土壤跡土層

1. 黒褐色微砂質土
2. 黒色微砂質土
3. 黒褐色微砂質土

SK 25土壤跡土層

1. 黒褐色微砂質土
2. 黒色微砂質土・炭化物層
3. 茶褐色微砂質土
4. 茶褐色粘質土
5. 黑褐色粘質土

SK 28土壤跡土層

1. 暗褐色微砂質土
2. 暗灰色微砂質土に暗褐色微砂質土がブロック状に混じる
3. 暗青灰色シルト
4. 暗褐色シルト
5. 黑褐色シルトに青灰色シルトがまだらに混じる

第11図 SK23・25・28土壤跡

り込みは約16度を測る。
埋土上層は厚さ30cmあり、
暗褐色微砂質土に黄褐色
シルトがまだらに混じる。
下層は、青灰色シルトと
暗褐色シルトがまだらに
混じる。

(15) SK23土壤跡

(第11図)

平面形は楕円形を呈し、
長径80cm、短径70cm、深
さ57cmを測る。

(16) SK24土壤跡

(第27図)

精査区南側西壁脇にある。径65cm、深さ70cmを測る。底は平坦である。埋土は黄褐色微砂質土に、暗褐色微砂質土がまだらに混じり、人為的埋土と考えられる。

(17) SK25土壤跡 (第11図)

精査区南東端にあり、SD129を切っている。平面形は不整の円形で、長径1m、短径90cm、深さ67cmを測る。底は全域が平坦である。壁は西側がオーバーハングしている。

木製箸 (第26図103・105・106)、短冊状木製品 (第26図110・111) が出土している。

(18) SK28土壤跡 (第11図)

精査区中央南側、SB40掘立柱建物跡中にある。平面形は楕円形で、長径78cm、短径65cm、深さ69cmを測る。底は平坦で、壁は約13度で掘り込まれている。

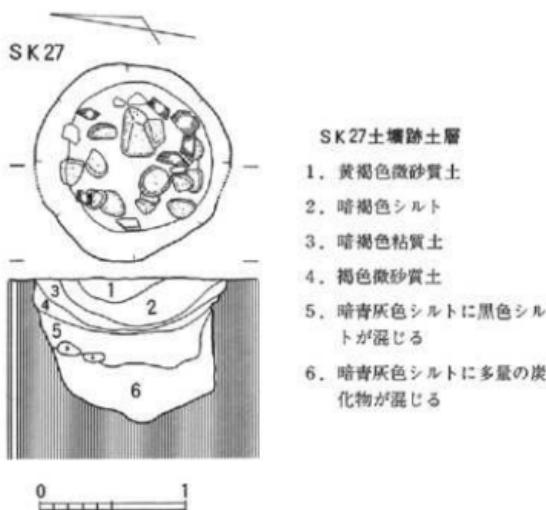
木製箸 (第26図107) が出土している。

(19) SK27土壤跡 (第12図)

精査区東側南よりにある。平面形は不整の円形で、径1.3~1.36m、深さ1mを測る。底は中央に向って窪んでいる。壁は南側の方が垂直に近く掘り込まれている。断面は舟底状を呈している。

底部より焼成をうけた、大小の礫が30個ほどと木片が出土している。また、埋土6層中の中位で草状の有機物が出土している。

出土遺物は、木製品 (第26図101・109・112)、板状木製品 (第26図108)、瓦質土器火鉢 (第19図58・59)、瓷器系陶器壺 (第19図60)、珠洲系陶器甕 (第20図62)、鉄滓 (図版14-



第12図 SK27土壤跡

63) が出土している。珠洲系陶器甕は、これをほぼ1個体に復元することができた。

(20) SD12溝状遺構 (第13図)

20~21~25グリッドで検出された。一部分の精査に終ったが、幅1m、深さ20cmを測る。北西側に幅30cmのテラス部を有する。主軸方向は真北より東へ45度偏る。埋土は単一層で、暗褐色微砂質土で、しまっている。

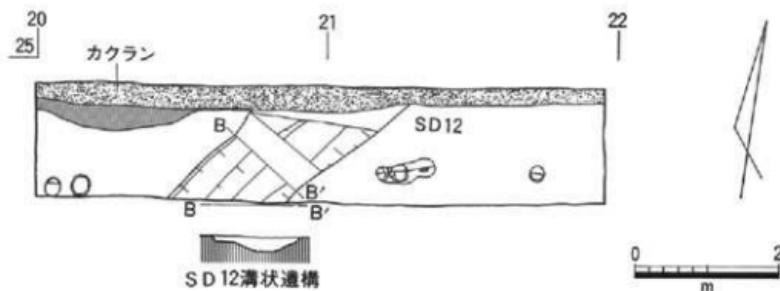
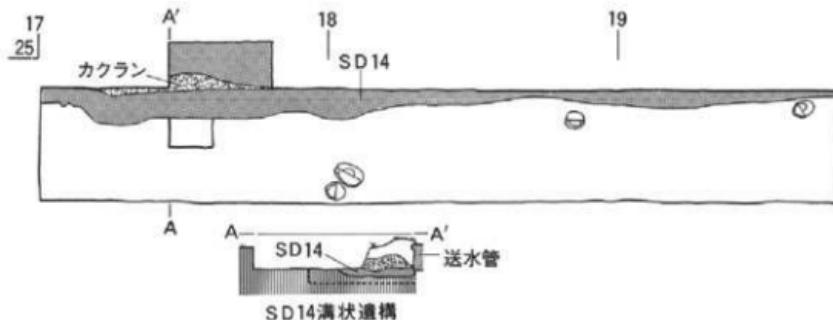
(30) SD14溝状遺構 (第13図)

Y軸25ライン上を横走しており、北辺が送水管施設工事の際に破壊されている。幅は現長で1.06m、深さ10cmの浅い溝である。埋土は単一層で、暗褐色微砂質土に黄褐色シルトがまだらに混じる。平面プランの確認と一部掘り下げに終っている。SD12との新旧関係は未詳である。

(31) SD29溝状遺構 (第27図)

精査区南辺にあり、東端はまだ伸びそうである。現長は7.6m、幅は25~48cm、深さ約43cmを測る。埋土は灰赤褐色シルトで、しまっている。

須恵器甕 (第14図3・4) が出土している。



第13図 SD12・14溝状遺構

表1 主要遺構内出土土器片点数表

種別 遺構	赤焼土器	黒色土器 (A・B類)	須恵器	陶磁器	計
SK 3 土壙跡	364	20	3		387
SK 10 土壙跡	1469	42	21		1532
SD 12溝状遺構	17		2		19
SK 15 土壙跡	164	14	5		183
SK 16 土壙跡	28	65	6		99
SK 17 土壙跡	25		3		28
SK 18 土壙跡	23	1	3		27
SK 19 土壙跡	3				3
SK 20 土壙跡	17		1		18
SK 21 土壙跡	90	1			91
SK 22 土壙跡	2		1		3
SK 23 土壙跡	15				15
SK 24 土壙跡	7		1		8
SK 25 土壙跡	11		1		12
SD 26溝状遺構	12				12
SK 27 土壙跡	22		4	5 点	31
SK 28 土壙跡	6	1			7
SD 29溝状遺構	1		2		3
SD 31溝状遺構	13				13

* SK27土壙跡からは珠洲系陶器の甕が破片で出土しており、これを1点として数えた。

表2 出土土器片総点数表

() 内はパーセンテージを表わす

種別 出土地点	赤焼土器 (%)	黒色土器 (A・B類) (%)	須恵器 (%)	陶磁器 (%)	総計
精査区内	612 (80)	46 (6)	83 (10.9)	24 (3.1)	765
遺構内	2411 (91.8)	154 (5.8)	56 (2.1)	5 (0.2)	2626
計	3023 (89)	200 (6)	139 (4.1)	29 (0.9)	3391

IV 出土遺物

本遺跡から出土した遺物は3,500点余で、土器、土製品、石製品、金属製品、木製品、自然遺物などである。大部分が土器片であり、赤焼土器が89%、約9割方を占め、黒色土器6%、須恵器4%と、共に1割に満たない出土量である。なお、このパーセンテージを出すに当っては、破片を1点としてかぞえた。これら土器は、大部分が土壤内より出土したものである。挿図中の出土遺物には、それぞれ観察表を付した。

(1) 須恵器

环、高台付环、蓋、壺、甕、器形不明の脚部片などがある。遺構内より出土したものは56片と少ない。环は底部の切り離しがヘラ切り手法によるものが多い。SD29出土の第4図3・4の高台付环は、ヘラ切り離しの後高台を付している。器形は、口縁部が直線的に外反し、体部下端が丸味を持っており、9世紀前半頃の時期と考えられる。

(2) 赤焼土器

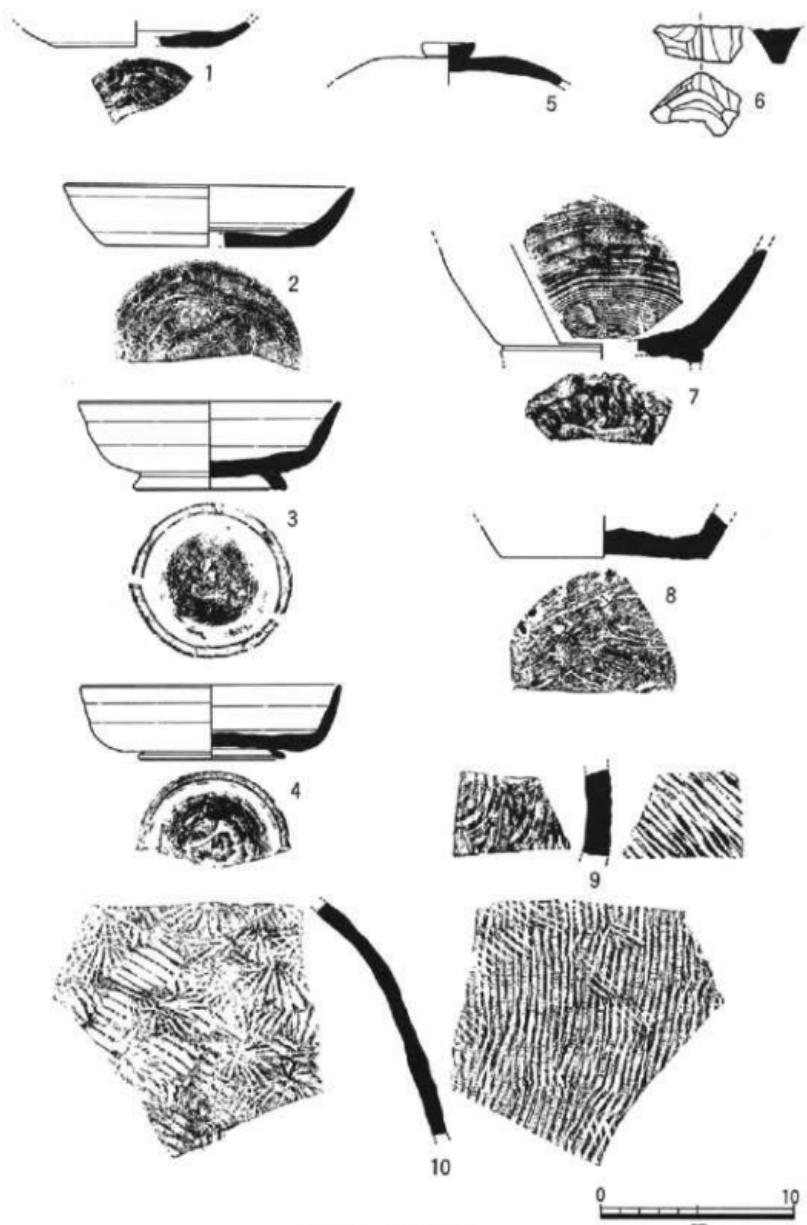
本遺跡出土の土器の主体を成すものである。ここで言う赤焼土器は、ロクロ水挽き・叩きによる整形など技術的に須恵器の技法を用いながら、意図的に酸化焰焼成を行っている土器を総称したものである。「ろくろ土師器」、「須恵系土器」、「赤焼き土器」、「あかやき土器」、「酸化炎焼成須恵器」、「赤褐色土器」、「赤色土器」などと呼ばれているものがこれに当るものと考えられる。

环は、すべて回転糸切りによる底部切り離しである。体部形態により三つに大別できる。

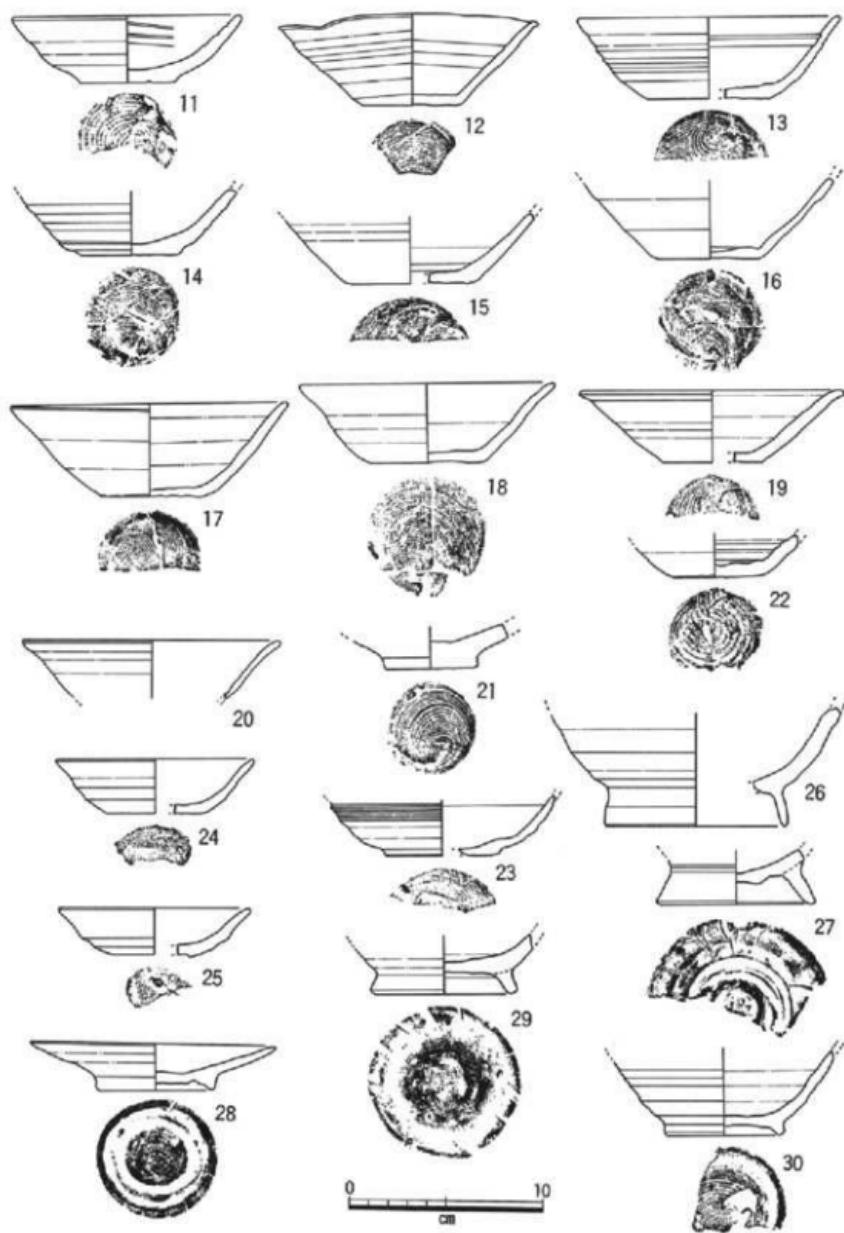
表3 須恵器

遺物番号	器形	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技 法	調整技法・備考	出土地点層位
		口径	底径	器高						
1	环	(84)			灰色	良	良	ヘラ切り		32-8~10G
2	环	(148)	(108)		灰色	粗砂混	良	ヘラ切り	底部ヘラ切りの後ナデ調整	27-14-I
3	高台环	(135)	72	46	灰色	粗砂混	良	ヘラ切り	付高台	SD29
4	高台环	(134)	(68)	39	暗灰色	良	良	ヘラ切り	付高台	SD29
5	蓋				灰色	良	良			21-12~13
6	?				暗灰色	良	良		脚部片 縦横のヘラケズリ	28-24-II
7	壺		(103)		暗灰色	良	良		内面部位の条線状痕、付高台	24-22-II
8	甕		(106)		灰色	良	良		底部切り離しの後ヘラケズリ	SK10-F2
9	甕				暗灰色	良	良		外面格子目状タタキ、内面青海波文	SK15-F
10	甕				灰色	良	良		内面格子目状アテ・菊花状のアテ	SK10-F6

* 計測値()は図上復元値



第14図 須恵器



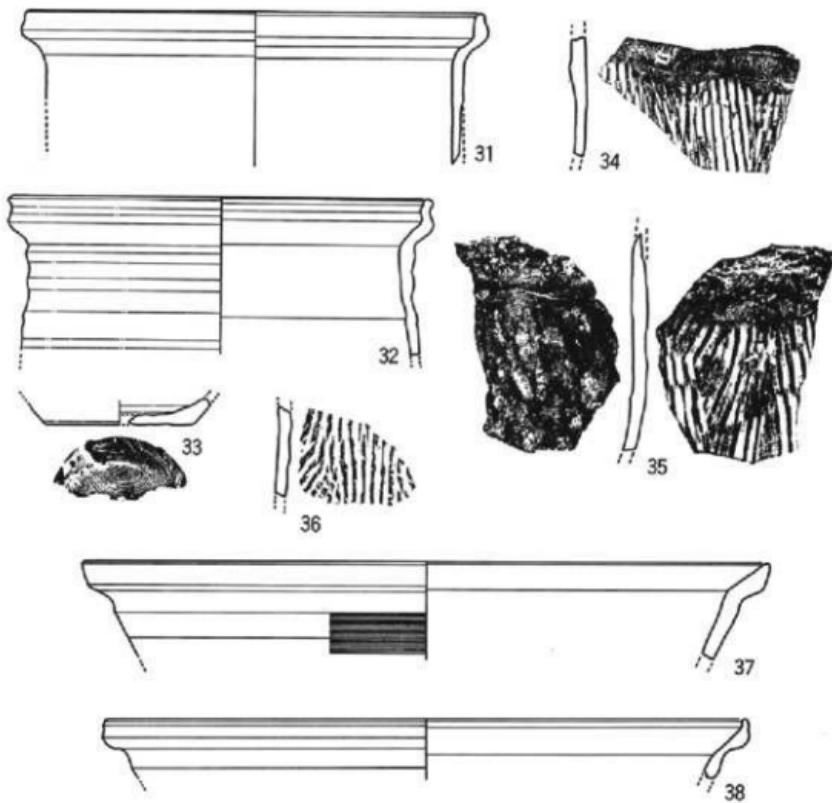
第15図 赤焼土器

一つは体部から口縁部にかけて外反気味にひらくもの（第15図18・19・20・24・25）、他は体部が直線的にひらくもの（第15図12・16・17・30）と、体部下端が丸味をおびるもの（第15図11・13）である。

本遺跡出土の赤焼土器環に類似する形態的特徴を持つものは、酒田市境興野遺跡、余目町上台遺跡などでも出土しており、11世紀を中心とする時期が考えられる。

（3） 黒色土器

A類（内面黒色化処理）は189片、B類（内外面黒色化処理）は11片出土している。すべて高台付環であり、比較的法量が大きく、内面はヘラみがきの後黒色化処理されている。

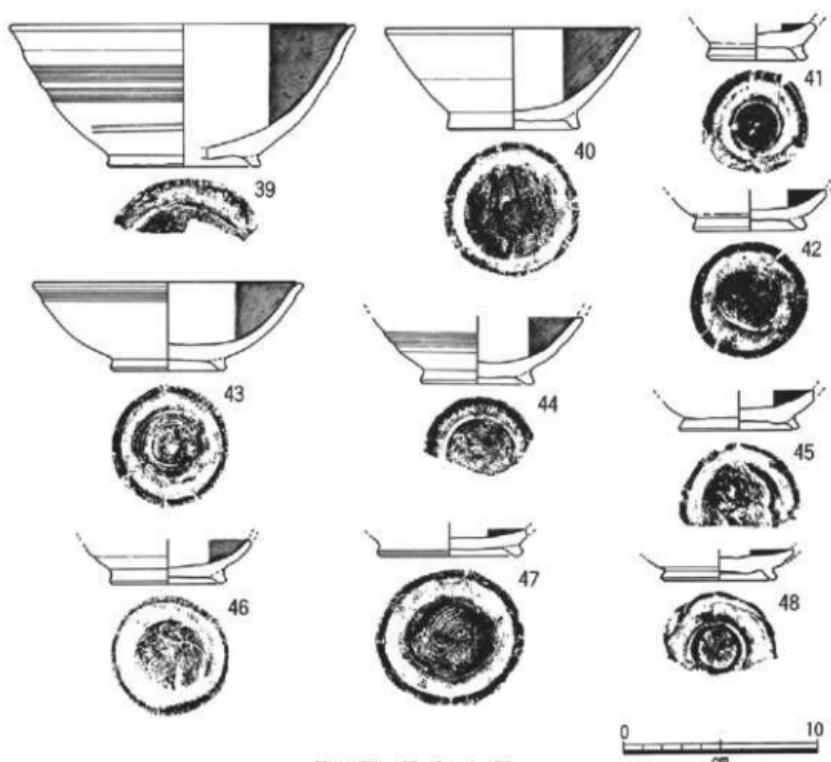


第16図 赤焼土器

表4 赤焼土器

通物番号	器形	計測値(%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技 法	調整技法・備考	出土地点 層位
		口径	底径	器高						
11	环	(119)	50	34	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面にヘラナデ調整	SK3-F4-5
12	环	134	(50)	47	赤褐色	良	良	回転糸切り	口縁部に継あり・体部外側に湾曲	SK15-F1
13	环	(136)	(62)	41.5	明褐色	粗砂混	良	回転糸切り	体部外面横位の線状痕	SK17-F1
14	环			53	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り	体部沈線・体部下半ロクロナデ	EP107-F
15	环			(66)	灰赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		SK15-F1
16	环			54	灰褐色	粗砂混	良	回転糸切り		23-24-II
17	环	(142)	(52)	48	赤褐色	良	良	回転糸切り		SK15-F1
18	环	(133)	51	40	暗灰褐色	良	良	回転糸切り	体部上半が外側に強く湾曲	SK16-F1
19	环	(135)	(51)	36	明褐色	粗砂混	良	回転糸切り		SK15-F1
20	环	(134)			灰褐色	粗砂混	良			SK10-F4
21	环			48	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り		SK10-F4
22	环			48	灰赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面顯著なロクロナデ	SK10-F2
23	环			(60)	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り	外表面顯著なロクロナデ	EP108
24	环	(102)	(52)	28	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り	外表面顯著なロクロナデ	SK3-F4
25	环	(100)	(46)	24	赤褐色	粗砂混	良	回転糸切り	外表面顯著なロクロナデ	SK10-F2
26	高台环			(90)	赤褐色	粗砂混	良			SK10-F1
27	台环?			(66.5)	赤褐色	良	良	回転糸切り		SE10-F2
28	高台皿	127	62	26	赤褐色	良	良	回転糸切り		SK15-F1
29	高台环			70	赤褐色	良	良	回転糸切り	底部ナデ	SK10-F2
30	高台环			(61)	明灰褐色	良	良	回転糸切り	外表面顯著なロクロナデ	SK10-F4
31	甕	(233)			明灰褐色	粗砂混	良		内面スス付着	SK15-F1
32	甕	(215)			明灰褐色	良	良		外表面スス付着、顯著なロクロナデ	SK21
33	甕			(74)	灰褐色	良	良	回転糸切り		SK3-F1
34	甕				明灰褐色	良	良		外表面条線状痕、内面スス付着	SK10-F3
35	甕				赤褐色	良	良		内面アテ痕、縦位のナデ	SK15-F1
36	甕				赤褐色	良	良		内面スス付着、外表面条線状痕	SK10-F4
37	堀	(353)			赤褐色	粗砂混	良		外表面浅い横位の条線状痕	EP25
38	堀	(308)			赤褐色	粗砂混	良		口唇部に山形の棱	SK10-F3

※ 計測値 () 内は図上復元値

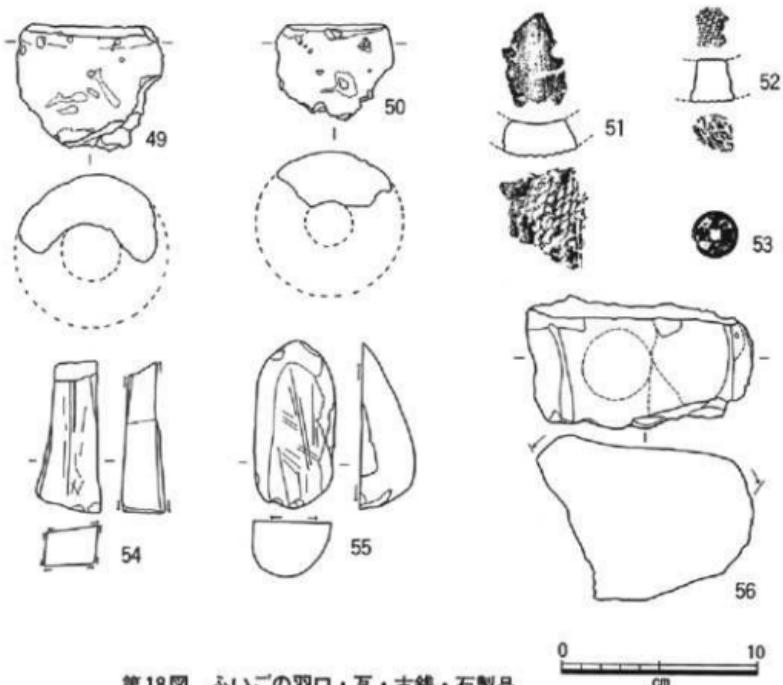


第17図 黒色土器

表5 黒色土器 (A類)

遺物 番号	器形	計測値 (%)			色調	胎土	焼成	切り離し 技法	調整技法・備考	出土地点・層位
		口径	底径	器高						
39	高台环	(178)	(77)	72	灰褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面ミガキ、炭素吸着	SK15-F1
40	高台环	(132)	66	52	明褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面緜徳のミガキ、炭素吸着	SK16-F1・2
41	高台环			48	褐色	良	良	回転糸切り	炭素吸着	SK10-F1
42	高台环			55	明褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面ミガキ、炭素吸着	SK15-F1
43	高台环	(140)	58	46	明褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面ミガキ、炭素吸着	SK16-F1
44	高台环			(55)	明褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面ミガキ、炭素吸着	SK15-F1
45	高台环			57	明褐色	粗砂混	良	?	内面ミガキ、炭素吸着	SK10-F4
46	高台环			58	明褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面ミガキ、炭素吸着	EP107-F1
47	高台环			72	褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面ミガキ、炭素吸着	SK16-F1
48	高台环			56	褐色	粗砂混	良	回転糸切り	内面ミガキ、炭素吸着	SK15-F3

※ 計測値 () 内は図上復元値



第18図 ふいごの羽口・瓦・古銭・石製品

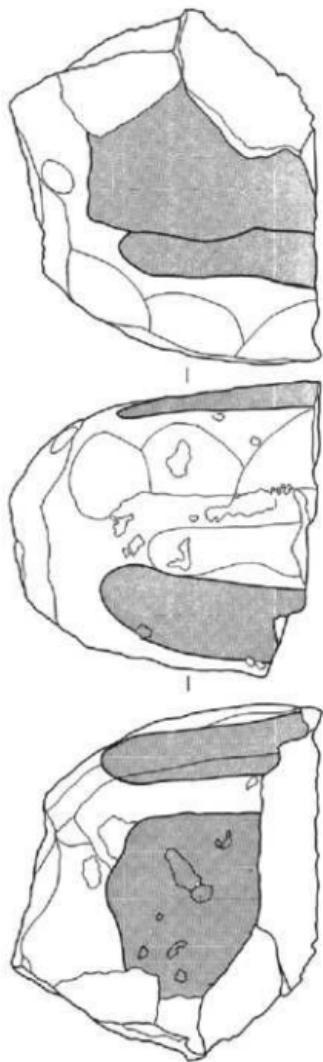
0 10 cm

表6 ふいごの羽口・瓦・古銭・石製品

遺物番号	器種	計測値(%)	色調・形態・成形手法の特徴・他	出土地点層位
49	ふいごの羽口	残長65 横径(78) 孔径(32)	黄褐色、小石含む、円筒状、棒状品に巻きつけて成形	SK15-F1
50	ふいごの羽口	残長51 横径(74) 孔径(23)	茶褐色、小石含む、円筒状、棒状品に巻きつけて成形	SK15-F1
51	平 瓦	残長54 残幅39 厚16~19	灰色、凹面に縫合のヘラミガキ、凸面に織目压痕	42-43-20-21
52	平 瓦	残長29 残幅20 厚22.5	暗灰色、凹面に布目压痕、凸面に織目压痕	27-12-I
53	古 銭	直徑24.4 内孔5.55 厚1.2	寛永通宝・初鋤年寛永年間(西暦1624~1643)	15-25-II
54	砥 石	残長77.6 幅31.5~24 厚16.4	明茶褐色、4面使用、うち1面大きくくぼむ	SK15-F1
55	加 工 石	長86 幅41 厚28.4	明灰色、1面を磨る、縫隙有り	24-23-I
56	加 工 石	残長64 残幅114 厚84~73	上面、側面を磨る・上面は中央を境にくぼむ	SK10-F4
57	加 工 石	長161 幅181 厚150	3面を磨る、1面は欠損、石英安山岩製	SK20-F1

* 計測値()内は図上復元値

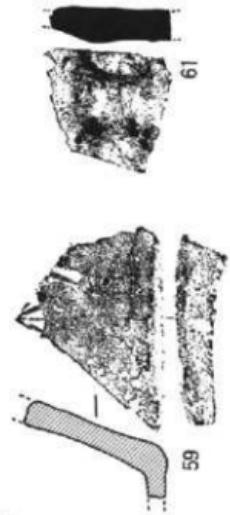
第19圖 石製品・中世陶器



57

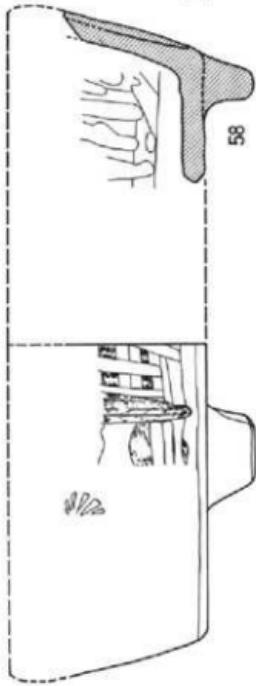


60

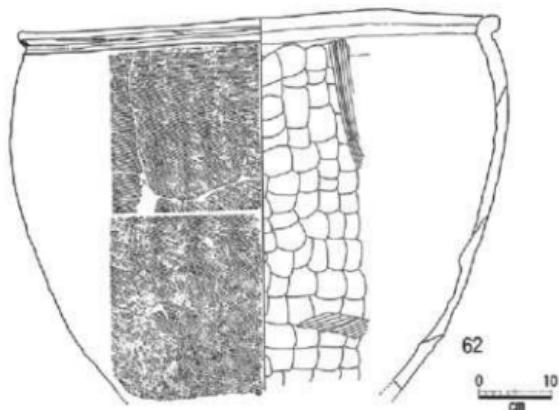


59

61



58



第20図 珠洲系陶器—壺

これらも赤焼土器環類と同じ11世紀を中心とする時期が考えられる。

(4) 中世陶器

中世陶器は主に、SK27土壤跡より一括して出土している。

珠洲系陶器 須恵器系の還元焰焼成による陶質土器で、これが珠洲焼（能登半島の珠洲市の周辺で製作された）そのもので移入品なのか、また珠洲焼類似の陶器が本地域で作られたものであるのか、まだ不明の点が多いので、「珠洲系陶器」と呼ばれている。

本遺跡出土の珠洲系陶器は、SK27土壤跡出土の壺（第20図62）だけである。

非常に大型の壺で、口縁型は円形ではなく隅丸方形のようにゆがんでいる。胎土は須恵器のように緻密ではなく、瓦質土器の硬質なもののような感じである。

珠洲焼の研究をされている、石川県郷土資料館の吉岡康暢氏に本製品の年代等の鑑定を依頼したので、下記にその所見を記しておく。

「年代は15世紀前半、珠洲系陶器編年の第V期に当る。本資料の形態・製作技術（総叩打2段成形）は、珠洲・西方寺第3号窯を標準とする珠洲系第V期の特徴を具備しており、法量も当該期の標準的規格品と言える。短く外屈する方（角）頭形口縁、撫で肩兜形胸部のタイプは、第IV期のそれに近似しているが、やや形式化し後出的要素が認められる。」

また鉄分の多い砂氣のかかった胎土も、基本的に珠洲窯の製品に通ずるが、なお理科学的方法（蛍光X線、放射化分析）により、珠洲と珠洲系の弁別を検討する必要がある。」

瓦質陶器 SK27土壤跡出土の火鉢（第19図58・59）である。これらは日常雜器として用いられたもので、藤島町平形遺跡を初め全国的に出土しているが、产地は未詳である。

瓷器系陶器 SK27土壤跡出土の壺（第19図60）がある。口唇部が鋭角に山形に立って

表7 中世陶器

遺物番号	器種	器形	計測値(%)	色調・形態・成形手法の特徴・他	出土地点層位
58	瓦質土器	火鉢	底径(296) 残存高97 器厚13	黒色。体部幅広にくぼみ、花弁状の器形。体部外面横横のミガキ、印文。内面縁位にミガキ、指ナデ。底部砂底。	SK27-底面
59	瓦質土器	火鉢	器厚13.4	黒色。体部外面横横のミガキ、印文。内面縁位の指ナデ、縦位のミガキ。底部砂底。	SK27-底面
60	瓷器系陶器	壺	口径(12.5) 残存高42	黒色。口縁部が直横に筋曲、口部山形の縫。黒褐色釉。	SK27-底面
61	越前系陶器		器厚15.3	灰褐色。外面緑色釉。内面茶褐色、凹凸あり。	14-25-II
62	珠洲系陶器	甕	口径565~650 残存高523 器径683 器厚10~21	灰黒色。胎土に白雲母、石英砂を含む。堅緻な構成。底部欠損。口縁部は「く」字形に外反の玉縁状で、全体に角張っている。体部下半で横位の多線状タクキ目。タクキ目幅4.5×5cmで条痕は4.5cmで16条を数える。内面に明瞭な講丸方形のアテ痕。1部に縦位・斜位のナゲ調整。	SK27-底面

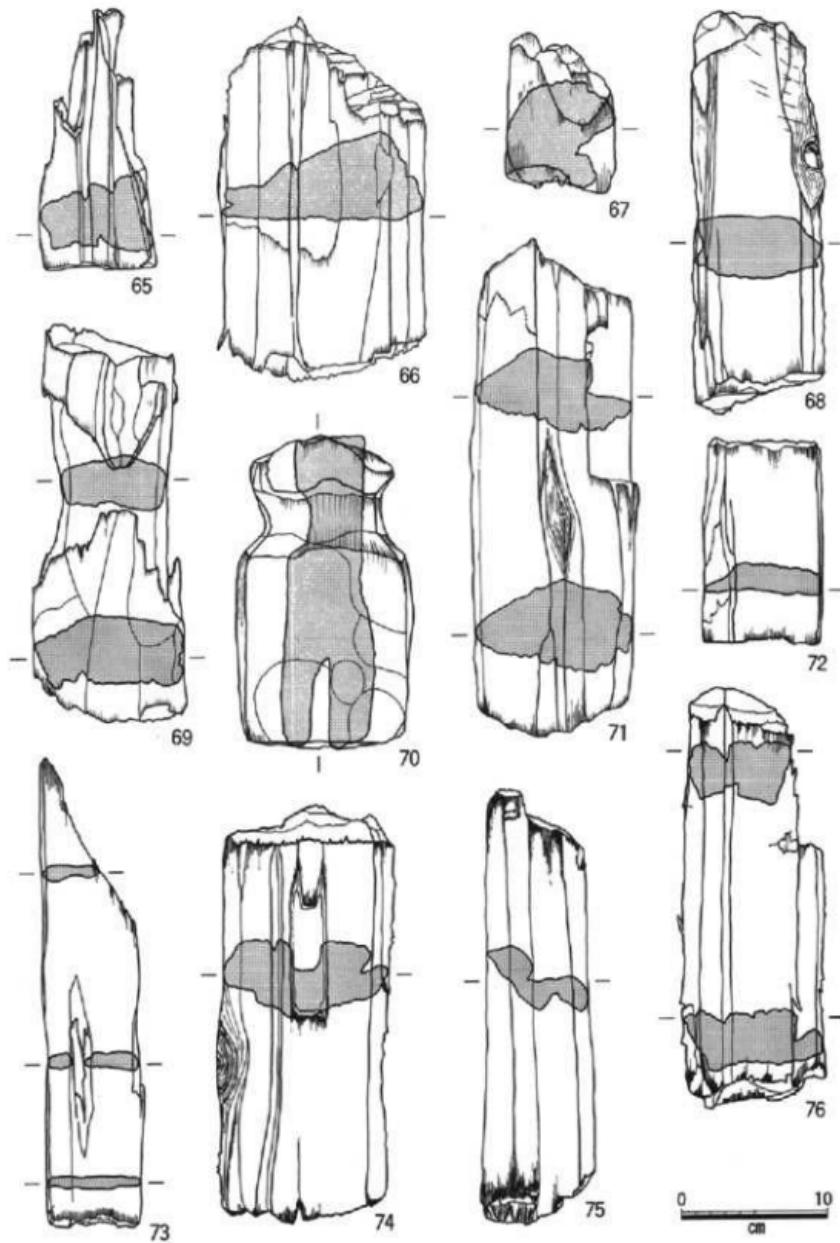
※ 計測値()内は四上復元値

表8-(1) 砧板・木製品

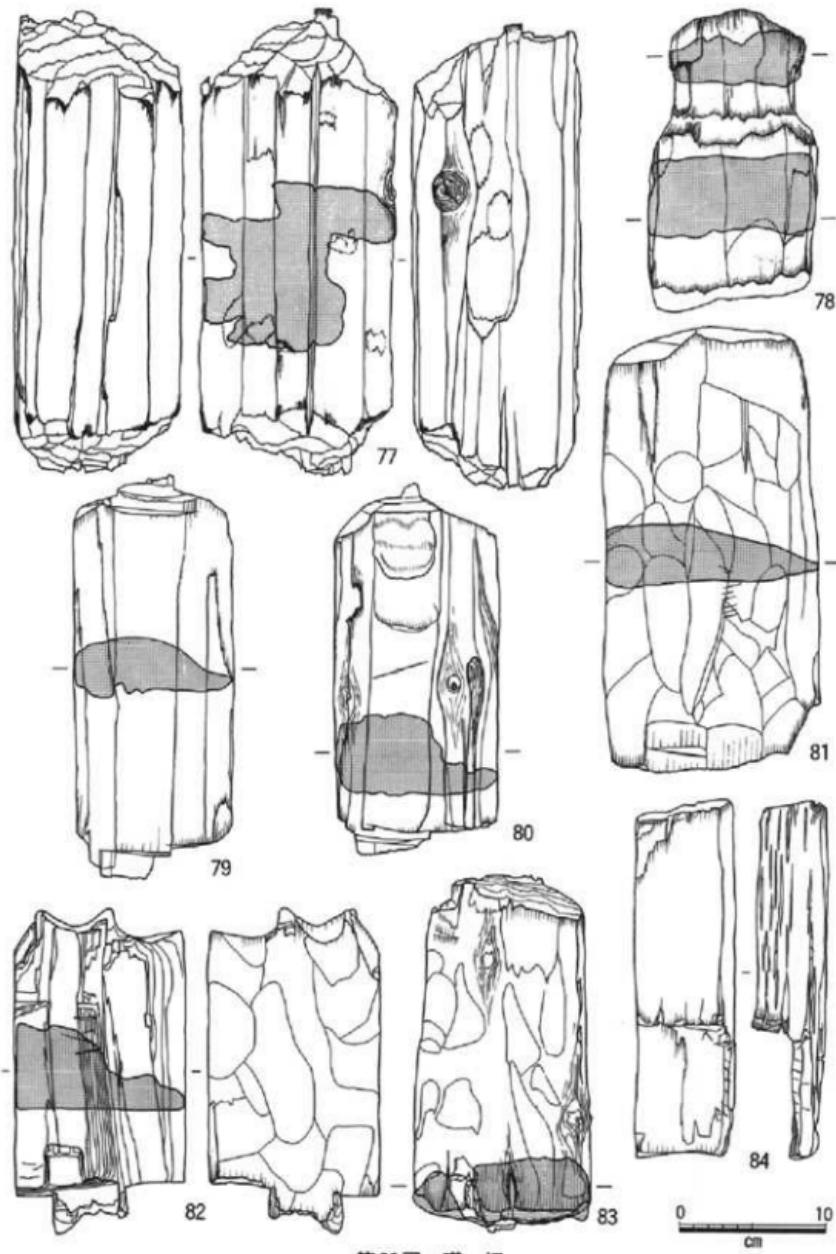
遺物番号	器種	計測値(%)	形態・成形手法の特徴・他	出土地点層位
65	加工木	長175 幅79.5 厚52	砧板として使用。柾目材で、先端がとがる。	EB-33
66	加工木	長246 幅141 厚58	砧板として使用。自然木を中心より縦に半截。上下端を山形にとがらす。	EB-33
67	加工木	長109 幅75 厚72	砧板として使用。自然木を切断。上端をとがらす。	EB-39
68	加工木	長273 幅89 厚40	砧板として使用。自然木を縦に半截し板状に仕上げる。上下端を斧で斜めに切断。	EB-41
69	加工木	長270 幅114 厚28~47	砧板として使用。自然木を縦に半截し板状に仕上げる。表面に手斧痕。上端を斧で切断。	EB-48
70	加工木	長213 幅121 厚35~62	砧板として使用。柾目材を板状に切り出す。上下端を斧で切断。上辺、上面、両側面を半円状にえぐる。下端より2.7×1.8cm、深さ11cmの穴あり。	EB-49
71	加工木	長336 幅114 厚60	砧板として使用。加工木を縦に半截。上辺に長さ10.2cm、深さ2.1cmのホゾ穴あり。建築部材を再利用。	EB-44
72	加工木	長140 幅81 厚19	砧板として使用。柾目材を使用。上端摩減。下端斧による切断。	EB-42
73	加工木	長318 幅68 厚5.5~12	砧板として使用。柾目板を使用。上端を斜めに削る。中央に5.5cm×1.1cmの穴を穿孔。	EB-52
74	加工木	長283 幅121 厚50	砧板として使用。加工木を縦に削る。中央に6.7cm×2.2cm、深さ1.8cmの納穴あり。建築部材を再利用。	EB-52
75	加工木	長294 幅78 厚32	砧板として使用。柾目材を使用。上下端を斧で斜めに切断。建築部材を再利用。	EB-53
76	加工木	長284 幅98 厚42	砧板として使用。柾目材を使用。上下端を斧で切断。右辺がL字状に削られる。建築部材を再利用。	EB-52
77	加工木	長315 幅134 厚114	砧板として使用。角材の上下端を斧で山型に切断。側面に幅1.8~2.2cm、深さ1.9cmの溝が彌されている。建築部材を再利用。	EB-52
78	加工木	長202 幅117 厚25~53	砧板として使用。柾目材を板状に切り出す。上下端を斧で切断。上辺、上面、両側面を半円状にえぐる。建築部材を再利用。	EB-60
79	加工木	長262 幅107 厚38	砧板として使用。自然木の外側面を縦に削る。上下端を斧で切断。	EB-73
80	加工木	長250 幅113 厚55	砧板として使用。自然木の外側面を縦に削る。上下端を斧で切断。裏面に刃物による傷痕あり。	EB-73
81	加工木	長302 幅148 厚42	砧板として使用。柾目材を板状に整形。上面に明瞭な手斧痕。	EB-60
82	加工木	長220 幅117 厚57	砧板として使用。角材を縦に削る。明瞭な手斧痕。下端に4.85×3.44cmの穴あり。建築部材を再利用。	EB-69

表8-(2) 碓板・木製品

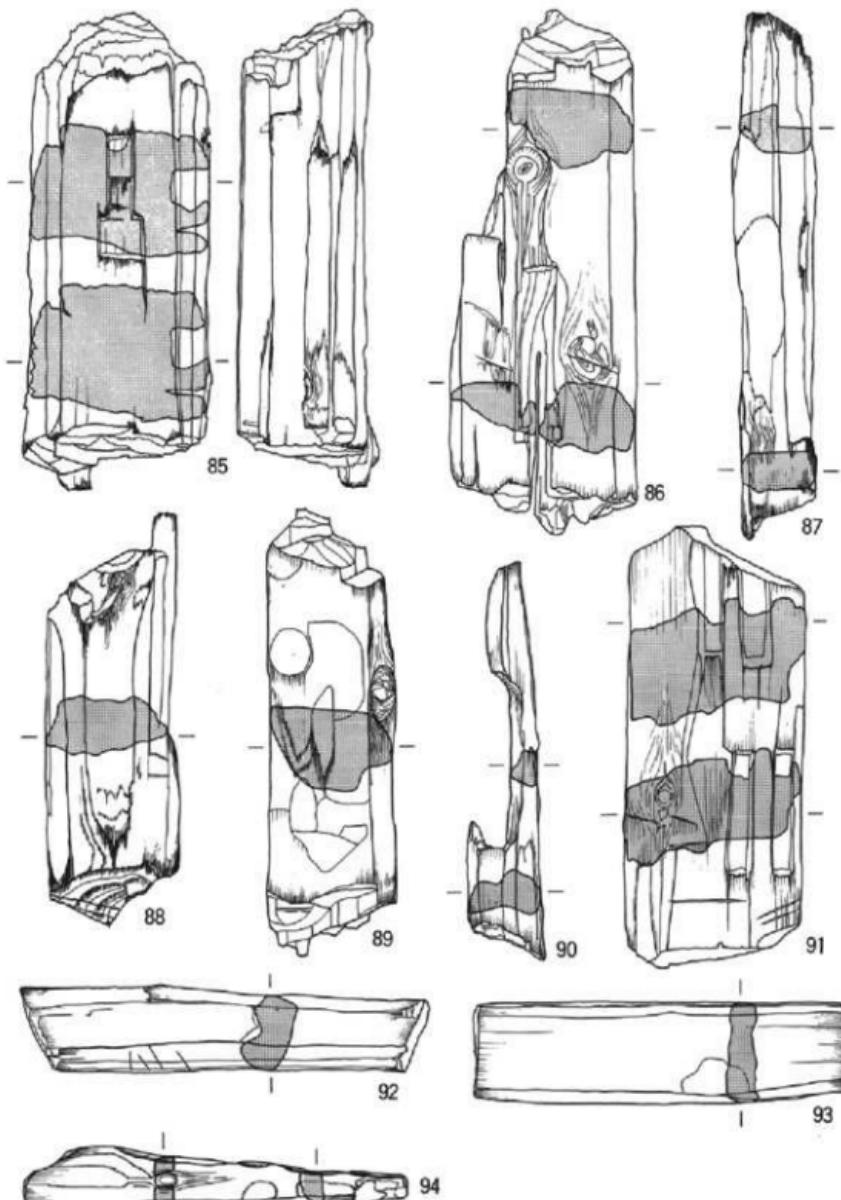
漁物番号	器種	計測値(%)	形態・成形手法の特徴・他	出土地点番号
83	加工木	長241 幅121 厚45	礫板として使用。板目材使用。片面、手斧痕。上下端を斧で切断。下端に幅1.85cm、深さ2.7cmの穴あり。達蓋部材を再利用。	EP-124
84	加工木	長241 幅69 厚16~50	礫板として使用。板目材使用。下端を斜めに切削。上端は、のこぎりで切削される。鍛ぎ手か。建築部材を再利用。	EB-86
85	加工木	長319 幅129 厚90	礫板として使用。加工木を礫に截断。上面に長さ8.4cm、幅1.4cmと2.75cm、深さ1.55cmと0.95cmの連続した穴あり。側面に幅2.5cm、深さ2.5cmの溝。	EB-52
86	加工木	長354 幅127 厚53.5	礫板として使用。加工木を礫に截断。上面に手斧痕、刃物による傷痕あり。上面中央に11.6×2.4cm、深さ1.35cmの穴あり。	EB-64
87	加工木	長354 幅54 厚25~33	礫板として使用。板目材使用。断面が下端を除きL字形を呈する。上端を斜めに切削。	EB-53
88	加工木	長276 幅91 厚38	礫板として使用。自然木を礫に半載。上端を斜めに斧で切断。下端を山形に切削。裏面に刃物による傷痕あり。	EB-53
89	加工木	長299.5 幅88 厚54	礫板として使用。上下端を斧による切断。上面に手斧痕があり、平坦である。	EB-65
90	加工木	長269 幅50 厚29.5	礫板として使用。板目材使用。上下端を斜めに斧で切断。中央に11.25×1.8cmの穿孔があったようである。達蓋部材を再利用。	EB-53
91	加工木	長298 幅121 厚48~70	礫板として使用。加工木を礫に截断。上下端を斜めに斧で切断。上面に幅4~6cm、深さ1.5~1.8cmの穴を削る。達蓋部材を再利用。	EB-53
92	加工木	長278 幅60 厚20~30	礫板として使用。板目材使用。上下端を斜めに斧で切断。L字形の加工あり。表面に刃物による傷痕あり。	EB-64
93	加工木	長256 幅70 厚13~20	礫板として使用。板目板使用。上下端を斧による切断。	EB-86
94	加工木	長262 幅43.5 厚13~16	礫板として使用。板目板使用。中央に15×9mmの穿孔あり。	EB-59
95	曲物	長560 幅26.6 厚4~7	板目板使用。外面斜面の刃物による傷あり。内面は縦位の切り込みが14mm間隔である。	SK20
96	円板状木製品	直径216~232 厚16~18	板目板使用。円形に切り出す。内周面上に段がつき1カ所直徑2.5mm、深さ8mmの穿孔あり。	SK10
97	脚?	長269 幅95 厚12	板目板使用。2枚の板をL字状に本釘で接合。本釘穴は5つあり、直徑は4mmである。	SK18-F
98	棒状木製品	長354 幅12 厚6~9.5	板目板使用。上下端を片刃風に削る。4mmの穿孔が上から61mm、80mm、103mm、60mmの間隔である。	SK18-F
99	加工木	長214 幅100 厚45	板目材使用。板目状に切り出す。上端を斧により切りとる。下端は欠損。	SK18-F
100	加工木	長247 幅116 厚42	板目材使用。板目状に切り出す。上端を斧により切りとる。下端も斧により切りとる。	SK18-F
101	板状木製品	長205 幅134 厚20	板目板。わずかに消音する。上下端は、のこぎりによる切断。裏面は焼成をうけ炭化している。	SK27-F5
102	加工木	長380 幅132 厚64	自然木を礫に半載。上下端を斧で切断。側面中央に、斧による切り込みあり。	SK18-F
103	箸	長117 幅5 厚2.5~4	板目材使用。4面の面取り。欠損品。	SK25-F3
104	箸	長71 幅5 厚3.5	板目材使用。6面の面取り。欠損品。	SK18-F
105	箸	長219 幅5.5 厚3.5~5	板目材使用。中央で2つに折れている。断面は横円形。	SK25-F3
106	箸	長135 幅6 厚2.5~6	板目材使用。6面の面取り。欠損品。	SK25-Y
107	箸	長223 幅7 厚2~4	板目材使用。5面の面取り。刃物による傷あり。	SK28-F3
108	板状木製品	長193 幅68 厚9	板目板を使用。上下端とともに丸鉋をむいて、斜めに削られる。3邊に縦4mmの本釘が2本残存。裏面とも手斧痕。	SK27-F5
109	板状木製品	長173 幅64 厚7~8	板目板使用。下端を丸鉋削る。上端は焼成をうけて炭化している。手斧による調理をおこなっている。	SK27-F5
110	札状木製品	長80 幅10 厚3~4.5	上端磨滅。下端欠損。上端に刃物による傷あり。	SK25-F
111	札状木製品	長180 幅24 厚5.5	先端を山形に削る。板目材使用で、両面とも平坦。	SK25-F
112		長168 幅74 厚10.5	片面、自然木外皮を板目にとる。裏面は焼成をうけ炭化している。中央に10.75×8mmの穿孔あり。	SK27-F5
113	曲物の底?	長215 幅116 厚5.5	板目板を丸鉋を持たせて切り落とす。端に3×2mm、1.5×1mmの穴を2箇あけてある。欠損品。	SK18-F



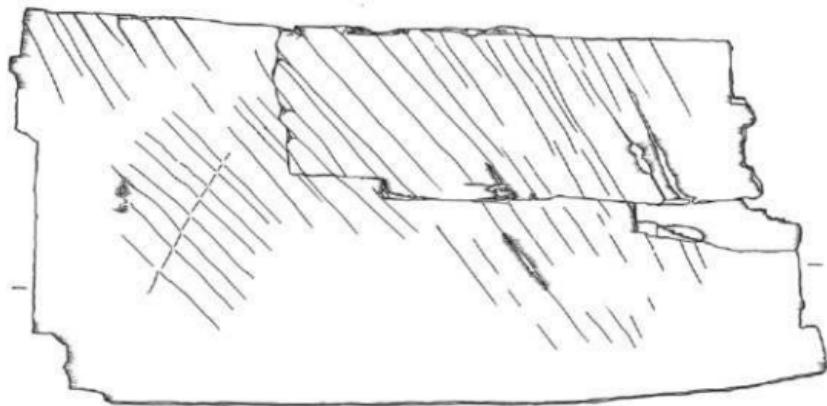
第21図 硬板・柱根



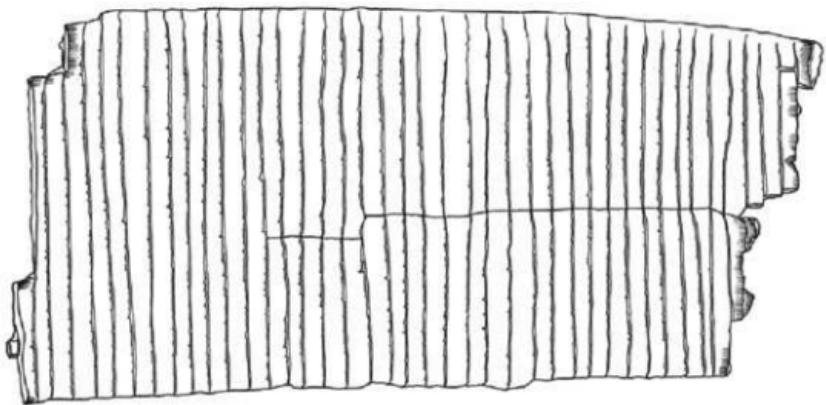
第22図 碣板



第23図 機板

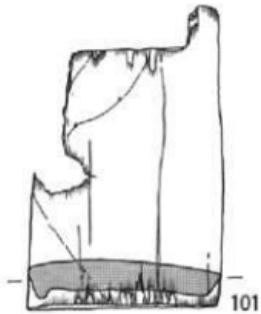
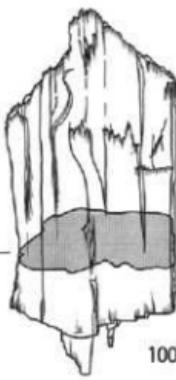
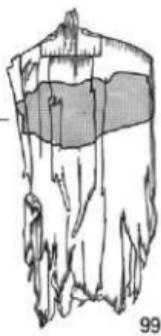
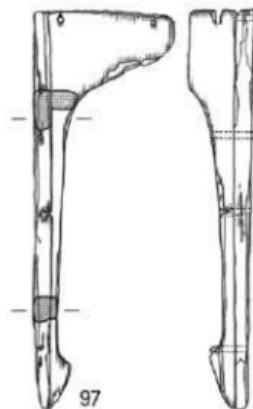
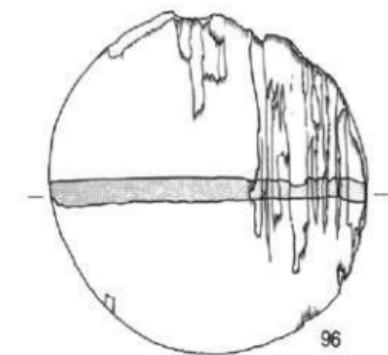


95



0 10
cm

第24図 木製品一曲物



0 10
cm

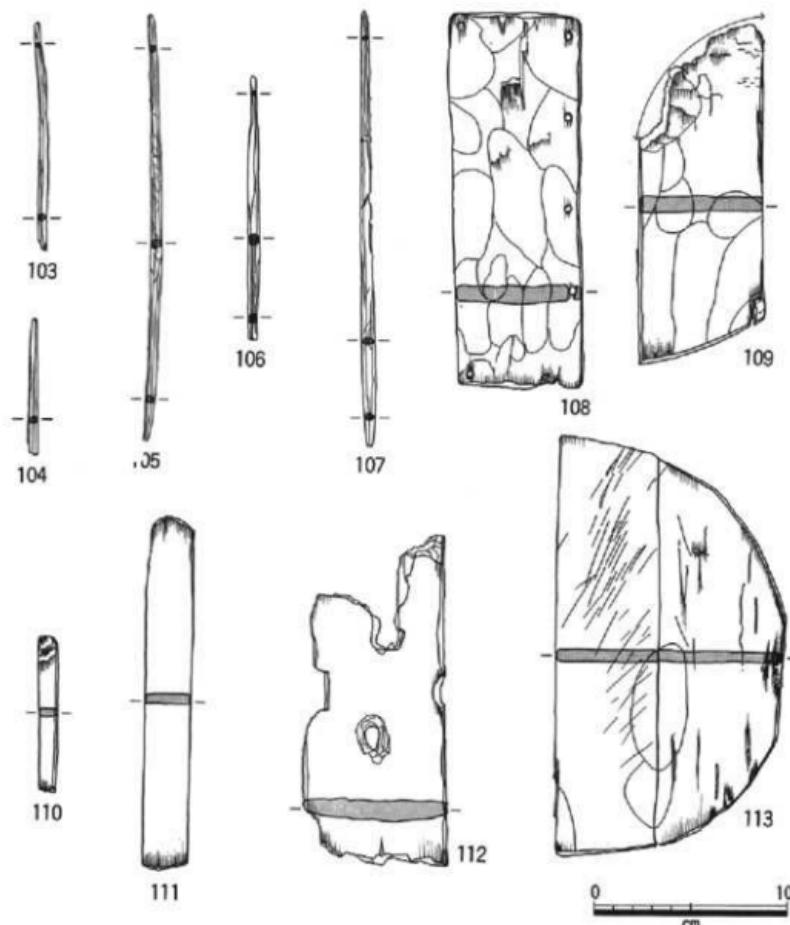
第25図 木製品

おり、黒褐色の袖が内外にかかっている。素地は灰白色で緻密なものである。

(5) 木製品・礎板

土壌内より木製品、柱穴掘り方内より礎板が出土している。

木製品は、曲物（第24図95）、円盤状板（第25図96）、脚かと考えられる加工品（第25図97）、穴を穿った細い棒（第25図98）、木箸（第26図103・104・105・106）、三辺に穴を穿った板（第26図108）、曲物の底と考えられる板（第26図113）、加工木（第25図99・100・101・



第26図 木 製 品

102、第26図109・110・111・112) などで、用途等については大部分のものが不明である。

礎板として使用された木材は、3種類に大別できる。自然木を断ち割って、そのまま利用したもの(第21図66・67・71、第22図79・80・83、第23図88・89)、板状に加工が加えられているもの(第21図68・69・72・76、第22図81・87・92・93)、建築部材を再利用したもの(第21図70・73・74・75、第22図77・78・82・84・85・86・90・91)に分けられる。

第22図77、第23図85・91などは角材を再利用したものである。

(6) 土 製 品

ふいごの羽口(第18図49・50)がSK15土壤跡より2点出土している。いずれも破片である。棒状のものに粘土を巻きつけて成形しており、中央部がわずかに細くなっている。口の先端は熱を受けて赤焼色になっている。胎土中には小石や粗砂が混じており粗い。

(7) 瓦

42-43-20・21グリッドより1点(第18図51)、27-12グリッドより1点(第18図52)の出土がある。51は平瓦の末端部で、凹面に縦位のヘラ状工具によるミガキが観察された。

(8) 金 属 製 品

15-25グリッドより寛永通宝(第18図53)が1点出土している。

SK27土壤跡の底部より鉄滓(図版14-63)が1点出土している。長さ5.66cm、幅4.74cm、厚さ2.5~3.4cmを測る。全体に灰褐色を呈し、こまかい気泡の痕がある。

(9) 石 製 品

砥石(第18図54)がSK15土壤跡より1点出土している。長辺の四面に使用痕がある。

性格不明の加工石(第18図55・56、第19図57)が3点出土している。

第18図56は、SK10土壤跡より出土したもので、片面のみ磨かれており、他面は欠損している。削り面は中央部がわずかに瘤み、台形状を呈している。

第19図57は、SK20土壤跡上層より出土したもので、自然礫の3面(スクリントーンの部分)を削っている。下端は欠損している。石英安山岩製と考えられる。

(10) 種 子

SK3土壤跡より桃、くるみの種子が各2点出土している(図版14-64)。

SK10土壤跡4層中より、ある程度まとまった状態で種子(図版15-114)が出土している。種皮の色調は明褐色、または黒褐色を呈したものがある。形はおおよそ円形を呈し、長さ3.8mm、厚さ2.7mmを測る。種類は今のところ不明である。

V まとめ

最後に、本遺跡で確認された諸事実を要約してまとめとしたい。

(1) 本遺跡では、約1,100m²を精査・実測し、掘立柱建物跡3、土壙跡15、溝状遺構9、ピットなどの遺構が検出された。

遺物は、須恵器、赤焼土器、黒色土器、中世陶器など3,400点余の土器・陶器片、約80点にのぼる木製品、ふいごの羽口、瓦、鉄滓、砥石、石製品、種子などが出土している。

(2) SB30は2×2間の倉庫風建物跡、SB40は7×4間の四面庇付建物跡、SB80は4×5間の両庇付建物跡が想定される。

これら掘立柱建物跡には、柱の基礎として礎板が据えられている。ほとんどが一枚の板材を使用しているが、SB40のエレメントであるEB52の礎板は、建築部材の角材を切断再利用し、井桁状に組んだ手の込んだ作りをしている。

三棟の建物跡は重複することなく「L」字状に並び、桁行方向が真北より西へ約45度偏っている。一つの企画に則ったことが理解される。

(3) 土壙跡はA～Fの5つに大別される。Aは平面形が隅丸長方形または不整形を呈し、掘り込みが浅く、赤焼土器片等を多量に出土している、SK15・17・21である。B～Fは平面がほぼ円形を呈するものである。Bは直径1m内外で、赤焼土器片等を多く出土したSK3・16・18・20・21である。Cは直径1m内外で、出土遺物がほとんど無いSK23・25・28である。Dは直径2.5mを測る大型の土壙で、赤焼土器片等が多量に出土したSK10である。Eは直径1m内外で、出土遺物がほとんど無く、埋土が人為による再堆積と考えられるSK19・22・24である。Fは珠洲系陶器及び他の中世陶器が出土したSK27である。

A～Dの各土壙は、出土している赤焼土器等の形態より、11世紀を中心とする年代が想定される。FのSK27は、珠洲系陶器の編年から、V期15世紀代の年代が当てられる。

(4) SD29出土の須恵器高台付环は、回転ヘラ切り離し、無調整の後、高台を付しており、底部から体部下端に丸味を持ち、体部が垂直気味に立ち上るものである。SD29溝状遺構は、9世紀前半の時期が想定される。

(5) SD12は、その主軸方向が真北より約45度東へ偏り、SB40等の建物跡梁行方向に平行するものである。これら建物跡に、直接的な地割り関係をもつ遺構と考えられる。SB40北西辺より27m離れている。

以上、時期的には9世紀前半から15世紀前半の遺物が出土しているが、主体をなすものは、11世紀を中心とする時期の遺物である。これは城輪柵跡の最後の時期にあたるⅢ期に平行し、律令体制国家の規制が弱まった頃である。遺跡の性格は、普通の農村集落よりも、役人ないし里長等の持ち家的なものが想定される。

第27圖 精查區內遺構配置圖

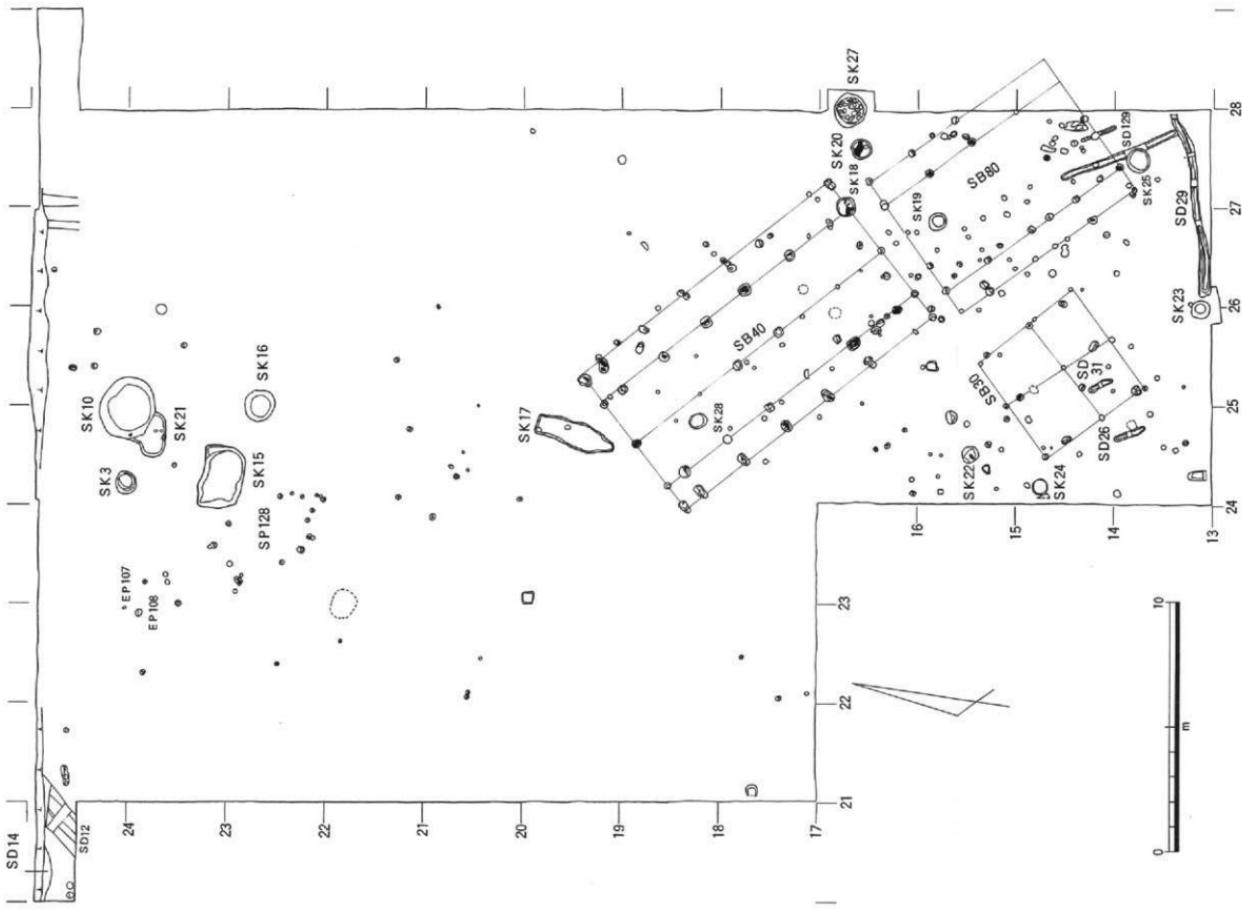
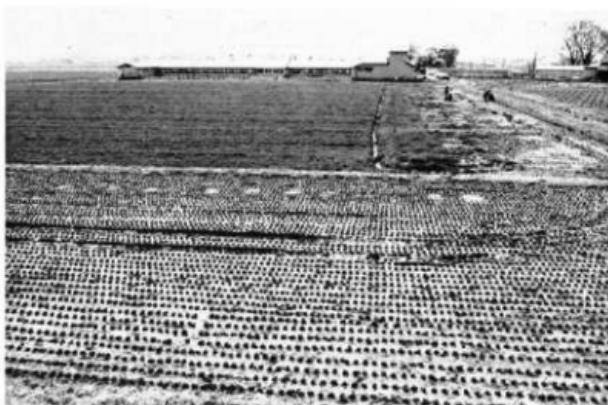
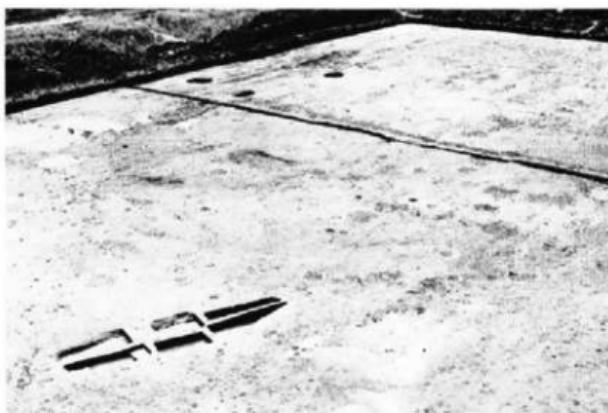


図 版

図版 1



遺跡近景（東より）

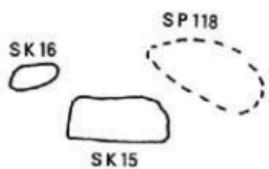


SB 40建物跡検出状況

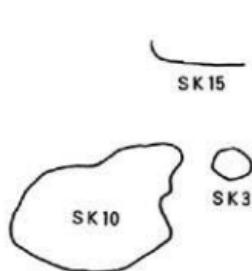


精査区南側遺構検出状況
(北より)

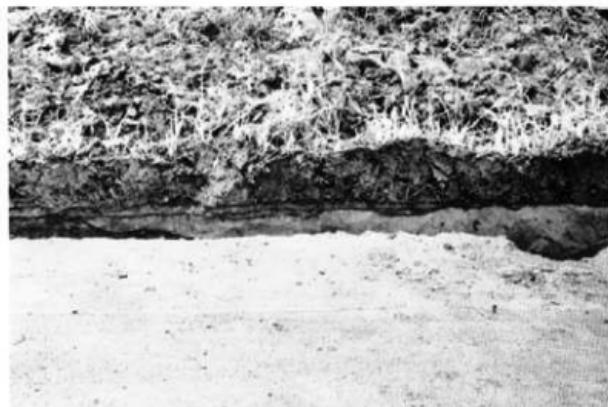
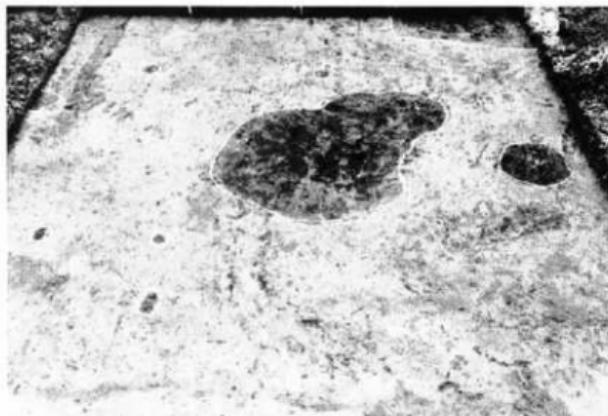
図版 2



精査区北辺
遺構検出状況（北より）



同 上



精査区西壁土層

図版 3

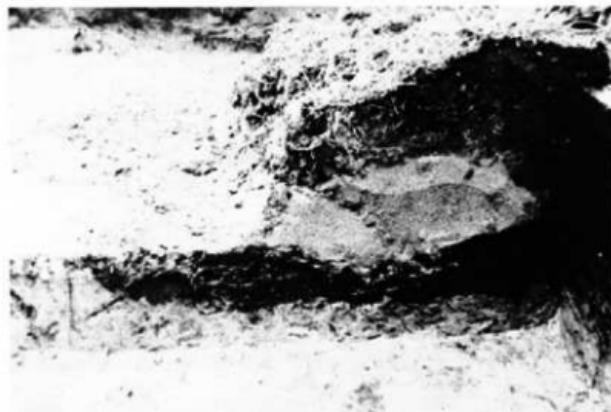
西側トレンチ造構検出状況



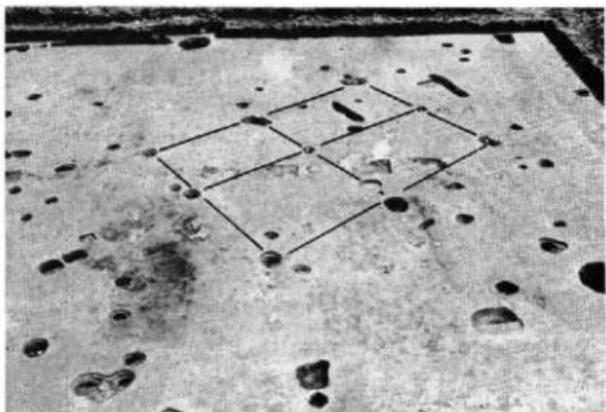
SD12溝状造構



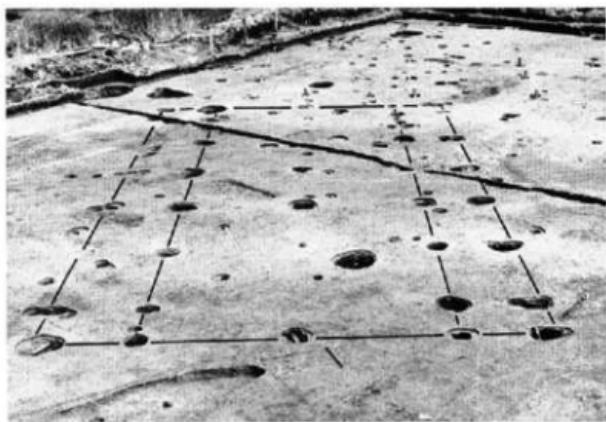
SD14溝状造構土層



図版 4



SB30建物跡 (北より)

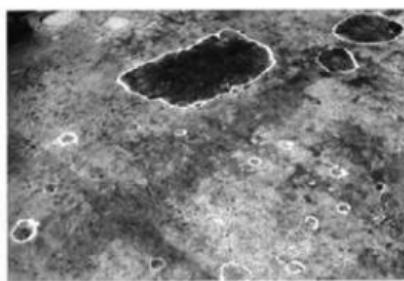
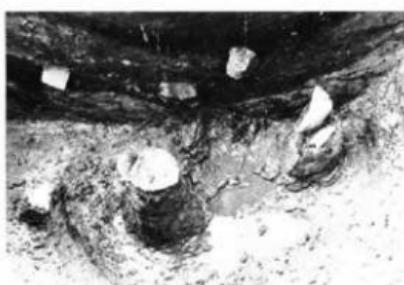
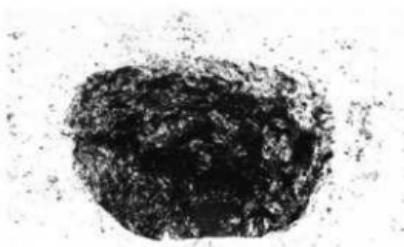


SB40建物跡 (北西より)



SB80建物跡 (北西より)

図版 5



SK 3 土壌跡土層

SK10 土壌跡土層

SK10 土壌跡

SK15 土壌跡

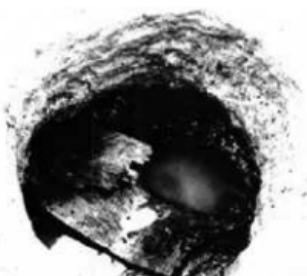
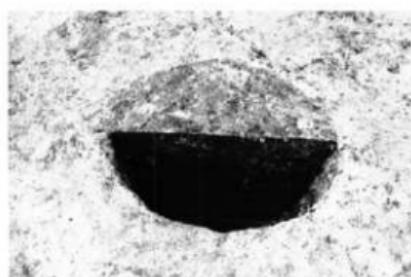
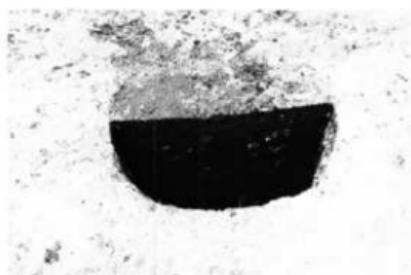
SK 3 土壌跡

SK10 土壌跡遺物出土状況

SK128 ピット群

SK15 土壌跡

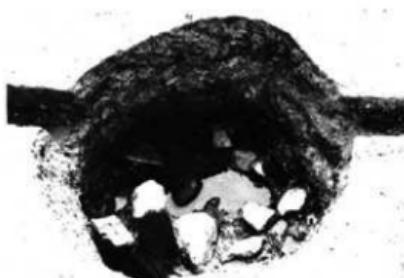
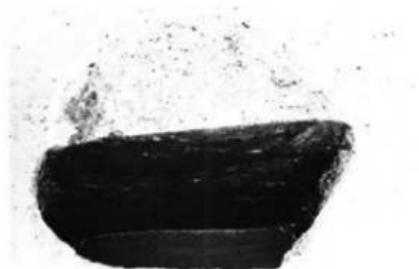
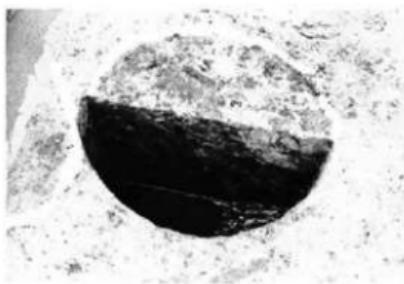
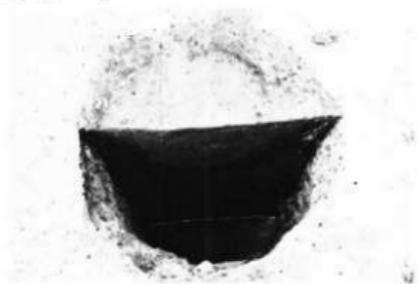
図版 6



SK16土壤跡
SK18土壤跡土層
SK19土壤跡
SK20土壤跡遺物出土狀況

SK16土壤跡土層
SK18土壤跡遺物出土狀況
SK20土壤跡
SK22土壤跡

図版 7



SK23土壤跡

SK25土壤跡土層

SK27土壤跡土層

SD29溝状造構

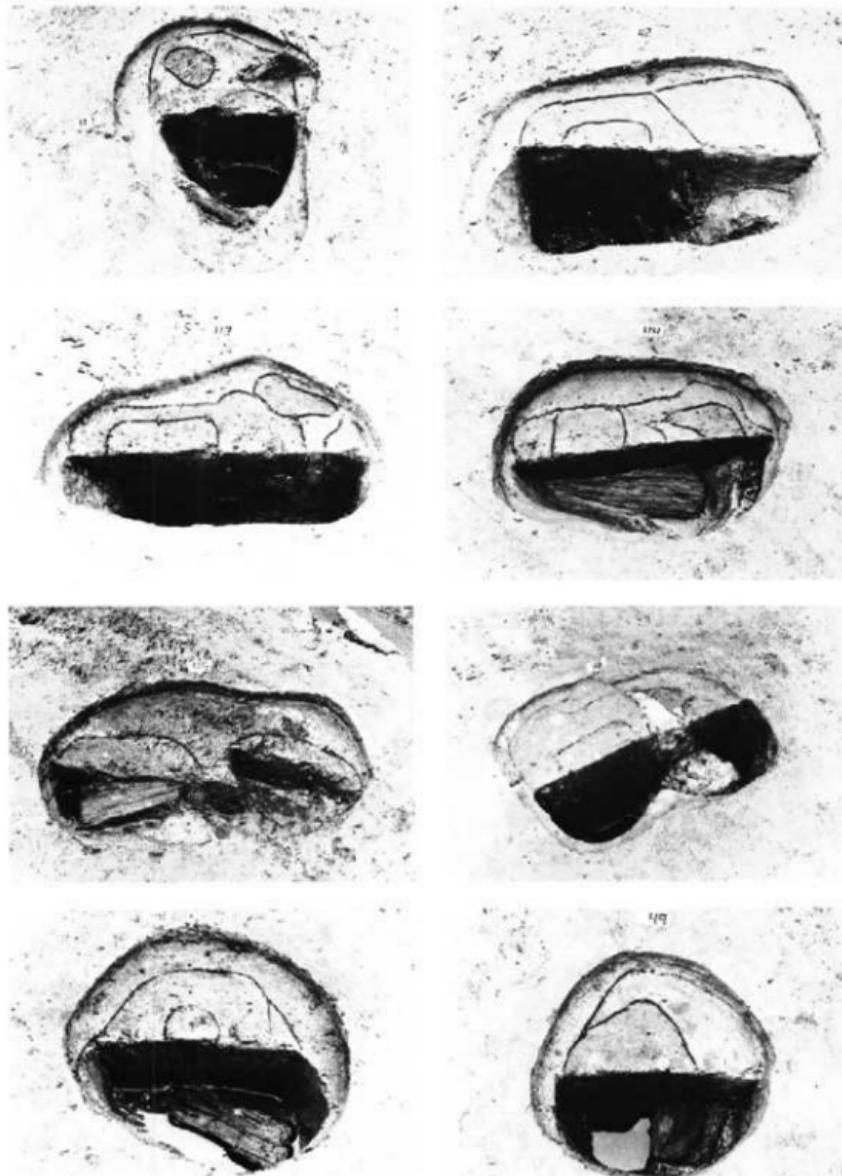
SK24土壤跡

SK28土壤跡土層

SK27土壤跡遺物出土状況

SD29溝状造構土層

図版 8



EB41掘立柱跡

EB43掘立柱跡

EB45掘立柱跡

EB48掘立柱跡

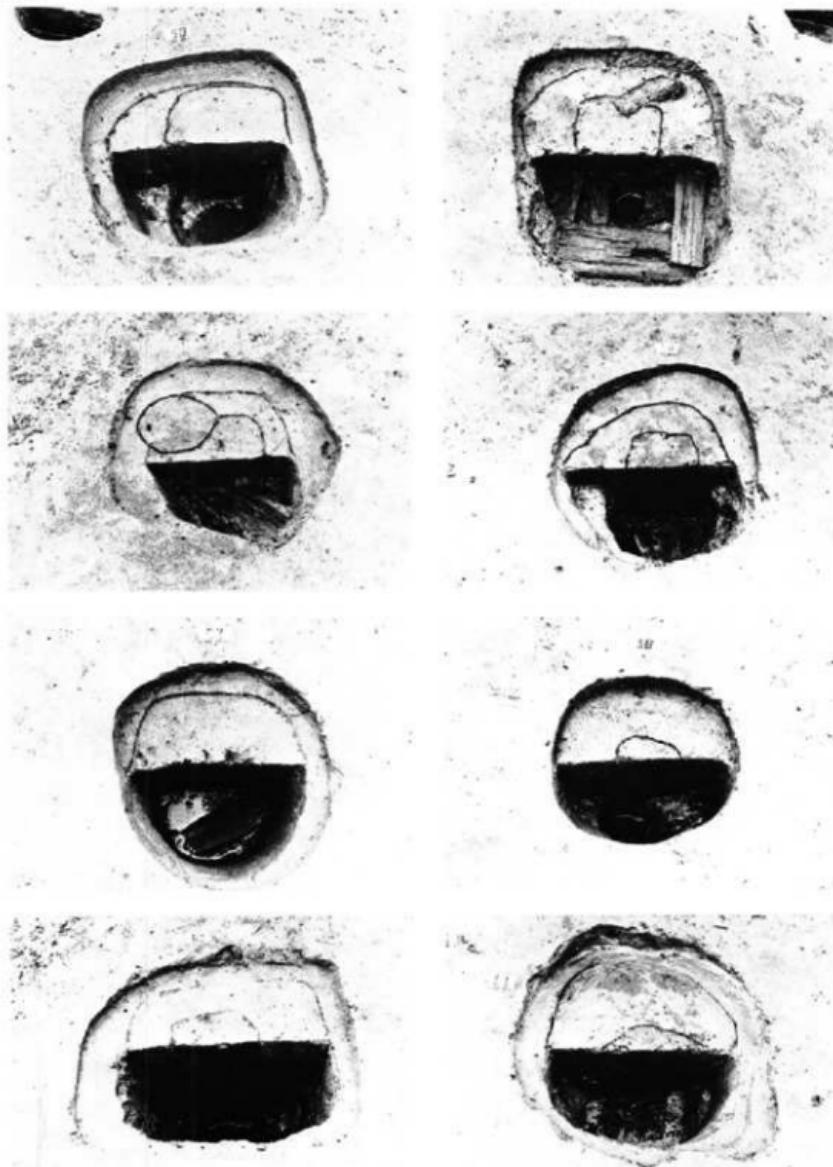
EB42掘立柱跡

EB44掘立柱跡

EB46掘立柱跡

EB49掘立柱跡

図版 9



EB50掘立柱跡

EB53掘立柱跡

EB57掘立柱跡

EB60掘立柱跡

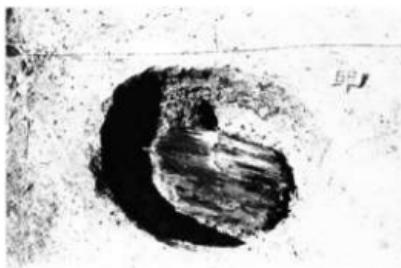
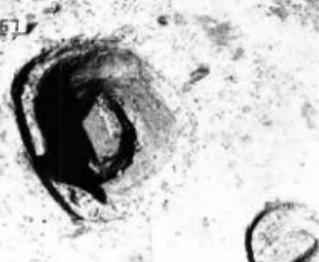
EB52掘立柱跡

EB54掘立柱跡

EB58掘立柱跡

EB61掘立柱跡

図版 10



EB62掘立柱跡

EB64掘立柱跡

EB67掘立柱跡

EB69掘立柱跡

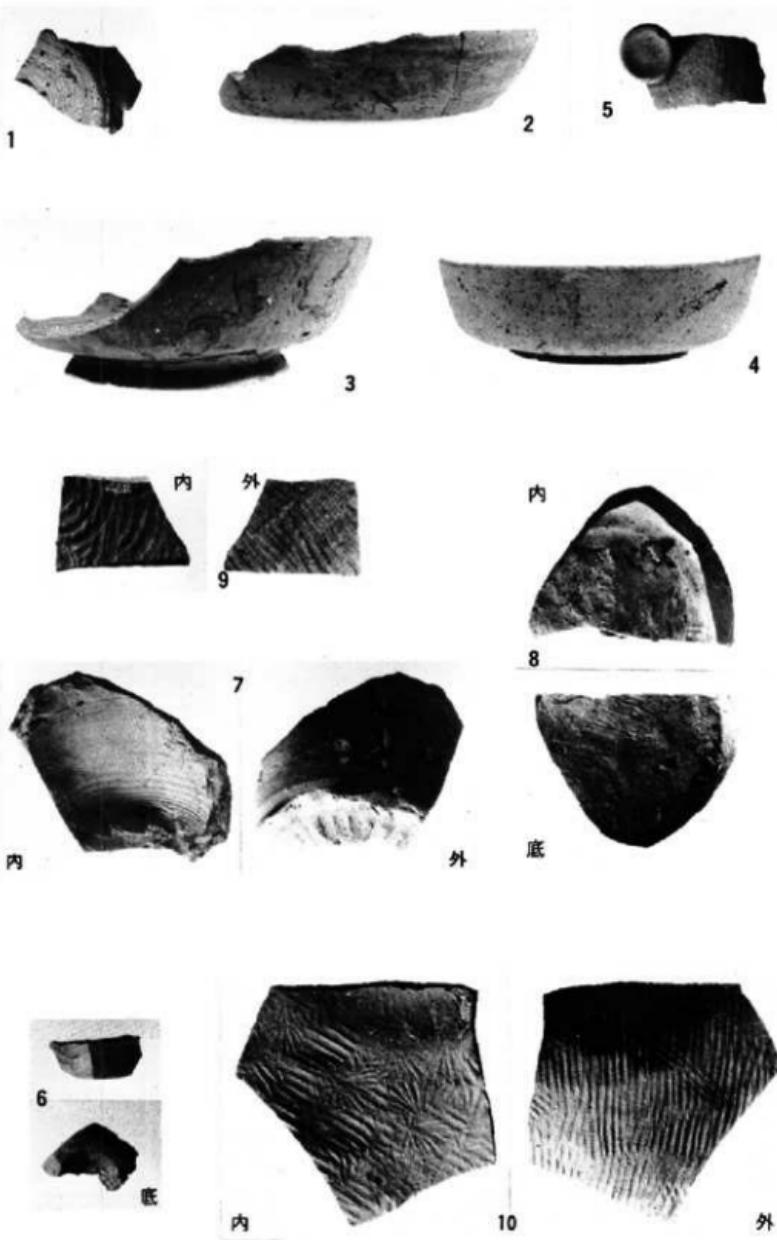
EB63掘立柱跡

EB66掘立柱跡

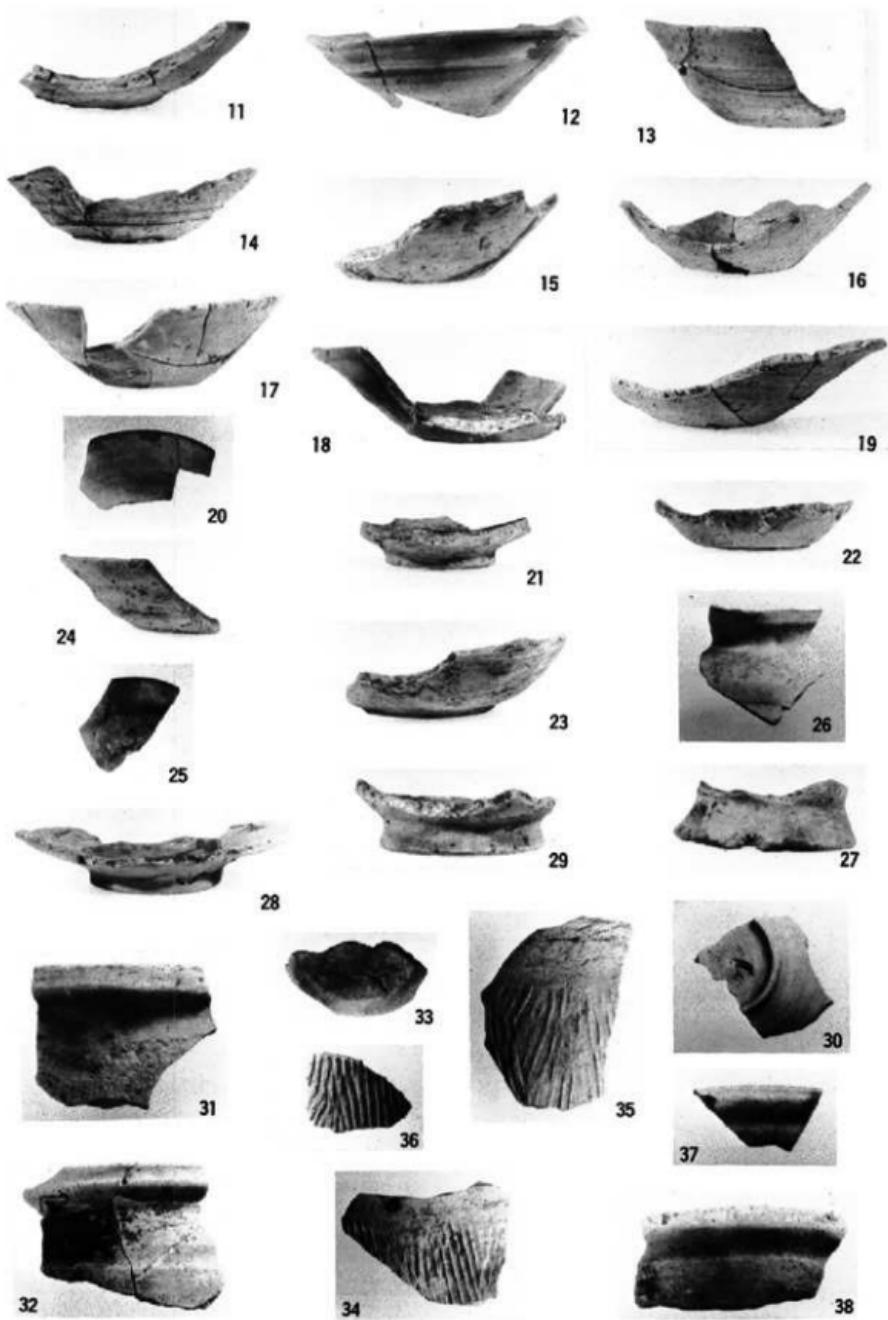
EB68掘立柱跡

EB71掘立柱跡

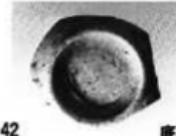
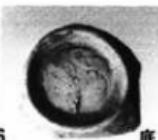
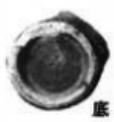
図版 11 須恵器



図版 12 赤焼土器



図版 13 黒色土器・ふいごの羽口・瓦



図版 14 石製品・金属製品・中世陶器・種子



56



57



55



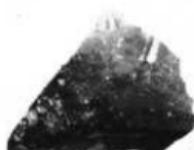
53



54



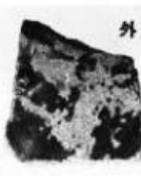
60



59



内



外



底



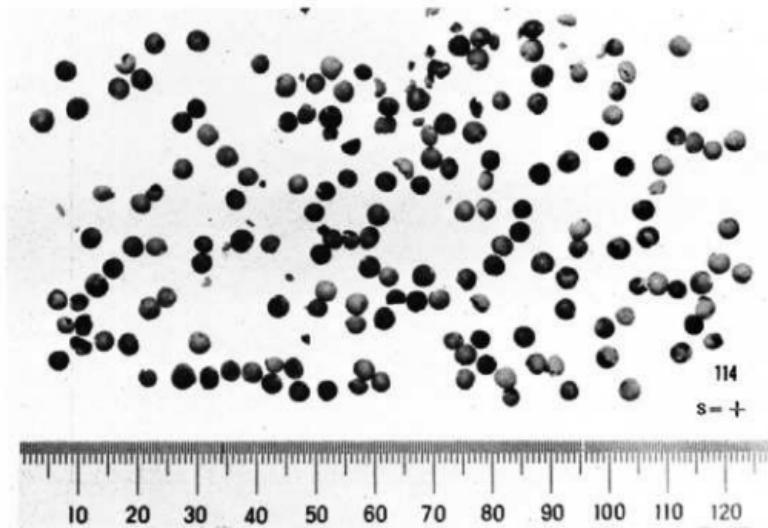
63



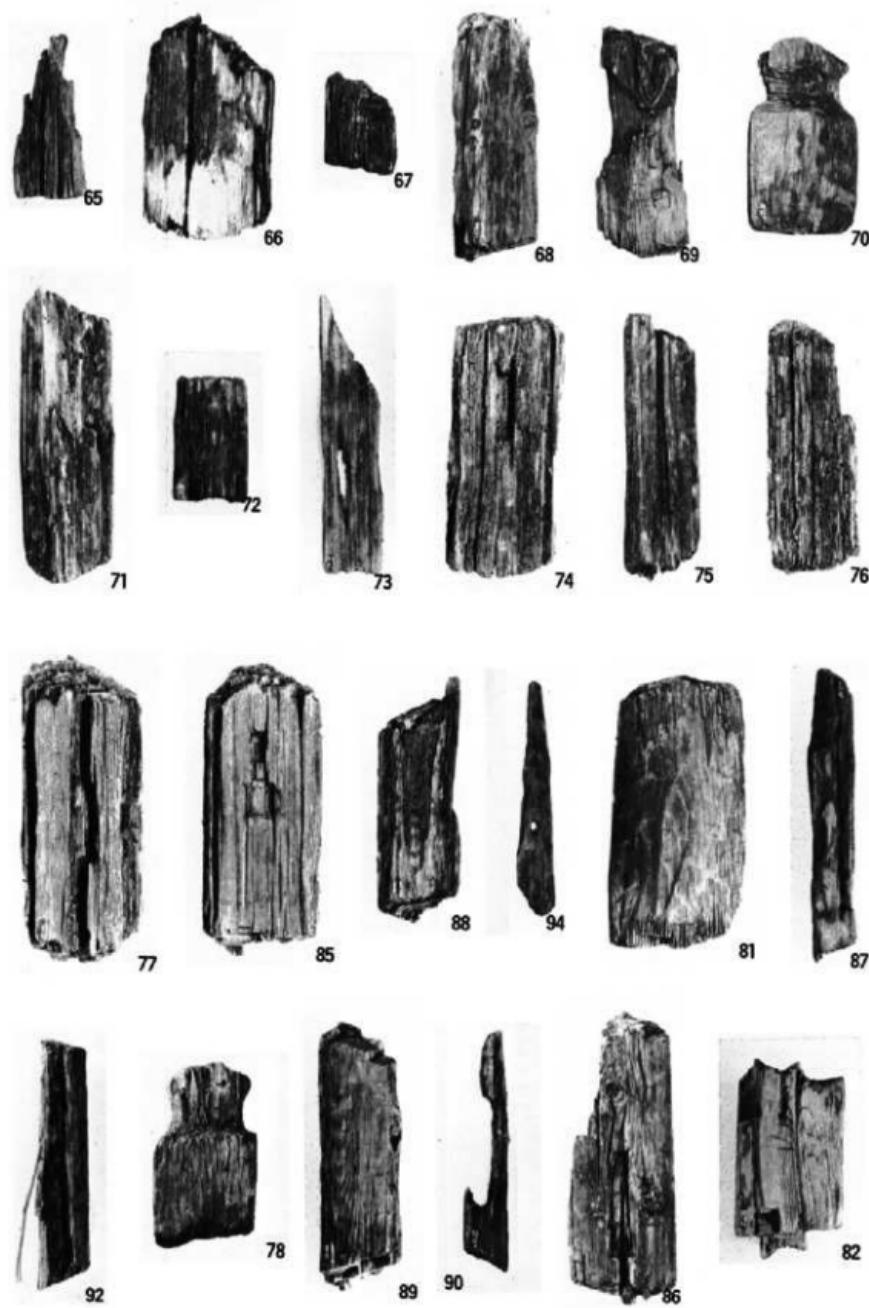
64

SK3土壤跡出土種子

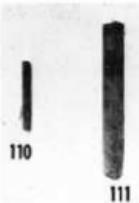
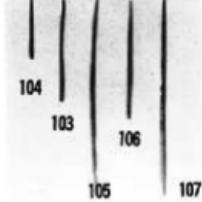
図版 15 珠洲系陶器(SK27出土)・種子(SK10出土)



図版 16 硫板



図版 17 磁板・木製品



外

山形県埋蔵文化財調査報告書 第55集

豊原 B 遺跡
発掘調査報告書

昭和57年3月23日 印刷

昭和57年3月31日 発行

発行 山形県
山形県教育委員会

印刷 鶴岡印刷株式会社
鶴岡市山王町14-24 ☎ 22-3080
